

木曾谷研究

第一号

東京大学木曾谷研究会

目次

南長野に残る東山道の痕跡	p.2~6
尾崎鹿三郎	
以仁王の乱概観	p.7~11
モルトケ	
超個人的木曾義仲論	p.12~17
源義亮	
伝「木曾義高の墓」探訪記 一栃木県佐野市の木曾義高伝説一	p.18~28
りょうつう	
「木曾福島合戦」を再考する	p.29~45
有馬武一	

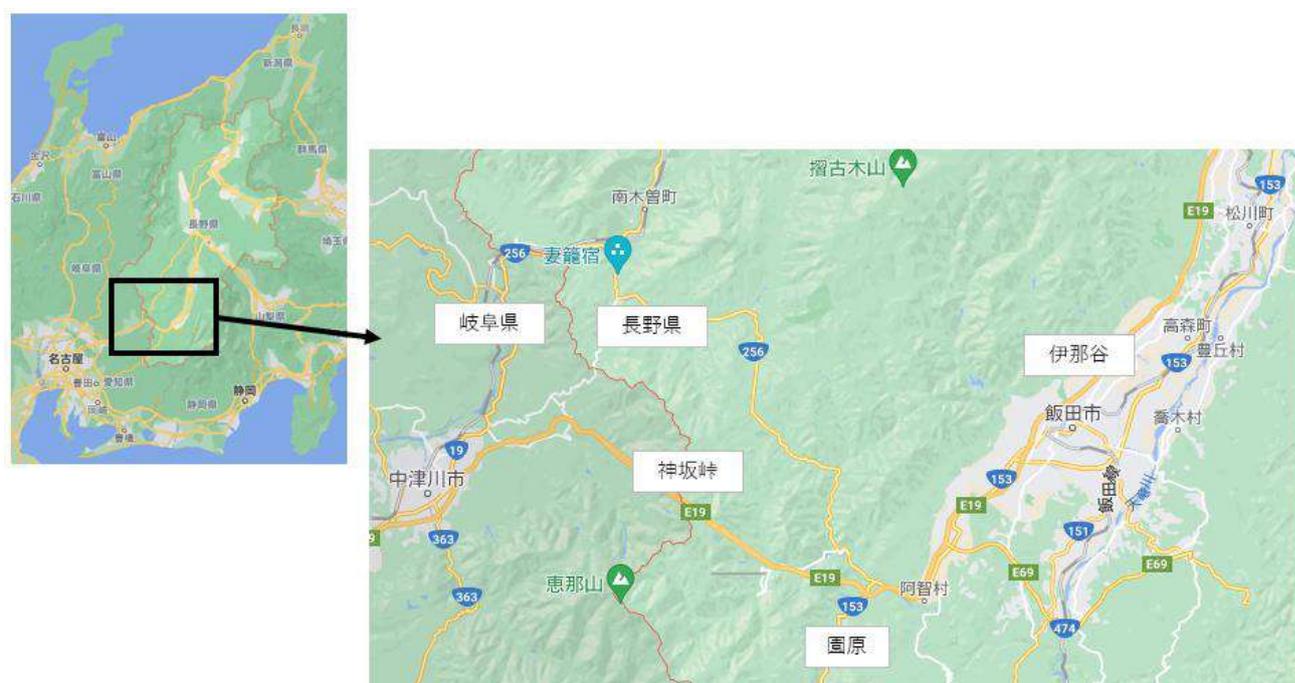
南長野に残る東山道の痕跡

著者 尾崎鹿三郎

1 はじめに

本稿では、古代の日本においてどのように道路網（官道）が整備されていたかを説明する。そのうち「東山道」が南長野を經由していたこと、そしてそれが現代に残す痕跡を紹介する。

図1 <本稿関連地図>

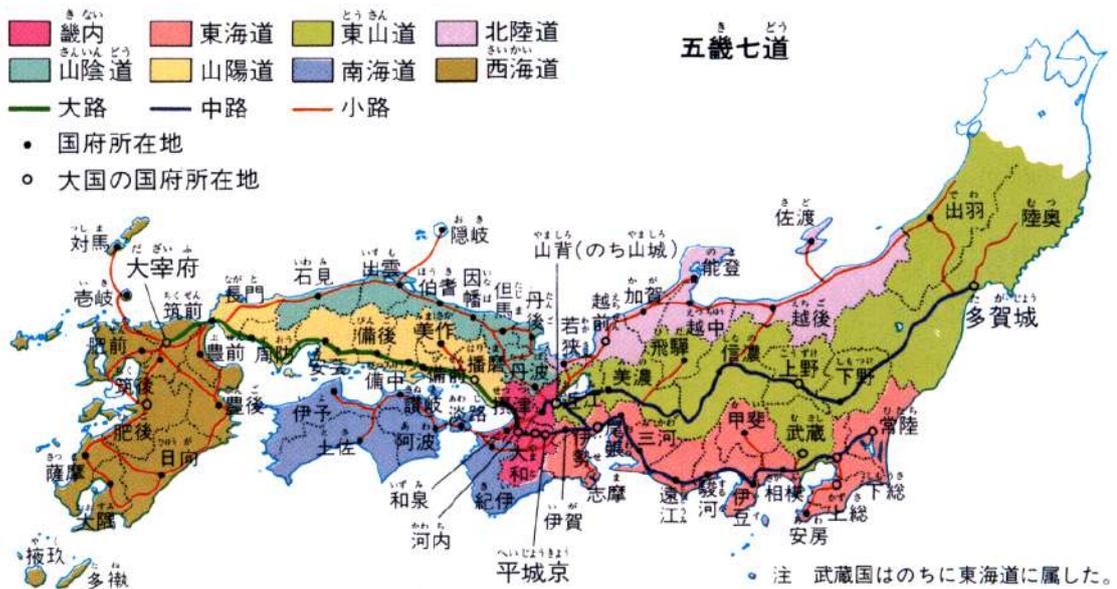


2 東山道とはなにか

東山道とは律令制における行政区分のひとつであり、また畿内とそれぞれの行政区分を結ぶ官道の名前でもある。

古代日本で始まった律令国家では、その行政区分を畿内・東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道に分けた。このうち東山道は現代の岐阜・信州・北関東・東北地方を含む。

図2 <古代の行政区分と官道> 出典：<https://www.catv296.ne.jp/~sensyo/gokisichidou.htm>



官道としての東山道は畿内を起点として現代の滋賀県、岐阜県、長野県、群馬県、栃木県を經由して東北地方まで伸びていた。

東山道の長野県内のルートは中津川市(岐阜県)→恵那山越え→伊那谷(飯田市・駒ヶ根市・伊那市)→松本平(塩尻市・松本市)→保福寺峠越え→上田市→小諸市→碓井峠越え→群馬県と考えられている。

3 官道とはどのようなものであったか

軍事的な目的が強く、太い直線道であったと考えられている（もちろん峠越えはその限りではない）。30里（16キロメートル）毎に休息・宿泊のための駅家が置かれた。駅家には馬も常備され（駅馬）、馬を交換しながら旅を続けることができた。

駅家の周辺民衆（駅子）には駅田と呼ばれる田が与えられた。駅田からとれる稲を民衆に貸し付け、その利息を用いて駅馬の購買・飼育にまかなわれた。駅子のリーダーが駅長である。

駅馬が利用される際には、駅子が馬を曳いて次の駅まで随行し、もとの場所に戻ってくるので1日32キロメートル歩くことになる。この負担に耐えかねて駅子が逃亡することもあった。

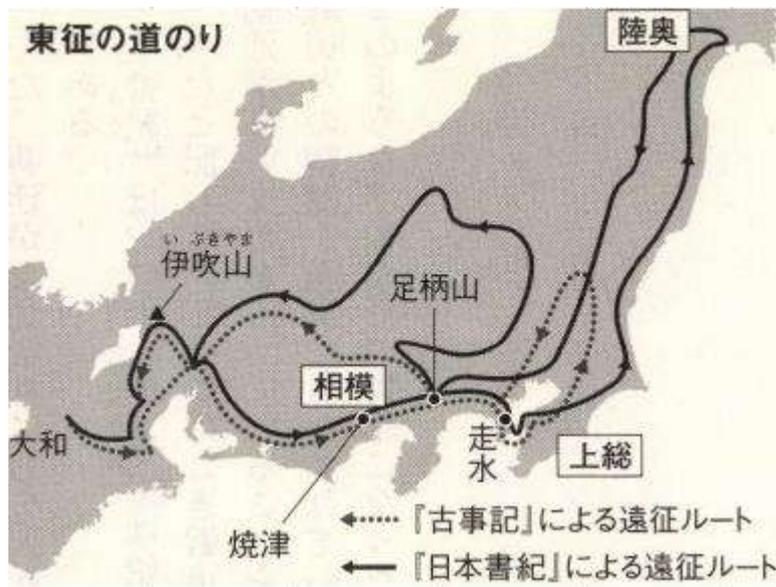
官道を利用できるのは律令国家の使者であり、当初の利用目的は天皇の崩御などに伴う緊急の使者に限られた。しかし時代が下るにつれてその利用範囲は拡大していき、瑞雲を見たという報告のために使われたり、美濃国で駅子を脅して私物の運搬をさせた事件もあった。

4 東山道を通ったと考えられる人々

「古事記」「日本書紀」によれば、日本武尊（ヤマトタケル）は父・景行天皇の命により、東日本で大和朝廷に従わない勢力を平定したとの事である。

「ヤマトタケル」という「人物」がいたというのは疑わしいが、少なくとも大和朝廷軍が東日本の平定に東山道を利用した、ということは言えそうである。

図3 <古事記と日本書紀から想定するヤマトタケルの東征経路>
出典：地図で読む「古事記」「日本書紀」



他に、平将門や源頼義・義家は畿内と東日本を往復したことが明らかであり、東山道を通ったことが想像される。

5 園原の帚木（ははきぎ）

東山道を岐阜県側から神坂峠を越えて伊那谷側に下ると、園原（長野県下伊那郡阿智村）という集落に至る。「延喜式」によれば神坂峠をはさんで美濃国側に坂本駅、信濃国側に阿智駅がおかれていたが、園原には置かれなかったようである。

ところでこの園原は古代・中世から京では認知されていたようで、源氏物語や新古今和歌集に登場する。

原文：その原や伏屋におふるははき木のありとはみえてあはぬ君かな

出典：新古今和歌集

作者：坂上是則

大意：園原の伏屋に生えている帚木のように、あるように見えるのに近づくと消え失せてしまうあなたの心

原文：帚木の心をしらでその原の道にあやなくまどひぬるかな

出典：源氏物語、光源氏から空蝉へ

大意：あなたの心は帚木のようにかき消えてしまったので、私はまるで園原で道に迷ったようだ

原文：数ならぬふせ屋に生ふる名の憂さにあるにもあらず消ゆる帚木

出典：源氏物語、空蝉から光源氏への返歌

大意：私のような平凡な女は、あなたにはふさわしくないので帚木のように消えゆくのです

以上のように当時の人々の間では、園原には帚木という近づくと消えてしまう木が存在すると認知されていたようである。

実は、この帚木と思われる木が園原にあり、右画像がそれである。ヒノキの老木で、昭和33年の台風で折れてしまったが、現在でも実在する。画像は元気なころのものである。

図4 <園原の帚木> 出典：<https://www.hahakigi-kan.com/>

畿内の人々にとって神坂峠を越えた信濃の国というのは想像を絶する遠さであったことが推察され、したがってこの園原に存在する帚木も伝説上の物体ぐらいの扱いだったかもしれない。



6 最後に

ヤマトタケルは東征を終えて信濃から美濃に抜ける際、神坂峠を經由したという。そしていまその神坂峠の真下には中央高速道路の恵那山トンネルが通っているのである。また、神坂峠の美濃側には古代の坂本駅が置かれていたが、いま建設中のリニアモーターカーはその近辺に岐阜県唯一の駅（仮称・美乃坂本駅）を設置する予定である。これらを単なる偶然だと位置づけることはできないと筆者は考えている。

7 参考文献

- 「日本の古代道路」 著：近江俊秀 角川選書 2014年
- 「道路の日本史」 著：武部健一 中公新書 2015年
- 「東山道の峠の祭祀 神坂峠遺跡」 著：市澤英利 新泉社 2008年
- 「南木曾町誌」
- 「1日で読める源氏物語」 著：吉野敬介 PHP文庫 2010年
- 「源氏物語 02 帚木」 著：紫式部 現代語訳：与謝野晶子 青空文庫 2012年
- 「地図で読む『古事記』『日本書紀』」 著：武光誠 PHP文庫 2011年
- 東山道・園原ビジターセンターはき木館 <https://www.hahakigi-kan.com/>
- 月川温泉郷 野熊の庄 月川 <http://gessen.jp/>
- 南信州 昼神温泉公式観光サイト <http://hirugamionsen.jp/>
- Weblio 古語辞典 <https://kobun.webl.io/>

以仁王の乱概観

東京大学木曾谷研究会 3年 モルトケ (ペンネーム)

1. はじめに

治承4年(1180年)4月、後白河上皇の第二皇子・以仁王は平家打倒を訴える令旨を発して挙兵に踏み切った。この挙兵はのちに治承・寿永の乱と呼ばれる内戦の嚆矢であり、平氏政権の滅亡・鎌倉幕府の成立を引き起こす契機となった。しかし治承・寿永の乱のなかで源平の対立や木曾義仲の生涯が脚光を浴びることは多い一方で、以仁王の行動が着目されることは少ない。そこで本稿では以仁王の挙兵について概観していく。

登場人物が多いので以下に簡潔な人物・用語紹介を付しておく。是非参照いただきたい。

- ・以仁王…後白河の第二皇子だが、親王宣下は受けていない
- ・後白河上皇…第77代天皇、保元3年(1158年)に二条天皇に譲位
- ・高倉天皇…後白河の第四皇子で第80代天皇、平清盛の義理の甥にあたる
- ・八条院…第74代天皇・鳥羽天皇と美福門院の娘で、莫大な荘園の保有者
- ・源頼政…源氏ながら従三位まで昇進したため源三位入道と呼ばれた
- ・源仲綱…源頼政の嫡男
- ・源仲家…源頼政の養子で、木曾義仲の実兄に当たる
- ・天台座主…天台宗を統括する延暦寺の住職
- ・大衆…僧兵

2. 以仁王の挙兵以前

以仁王は仁平元年(1151年)、父・雅仁親王¹と母・権大納言三条季成の娘高倉三位成子の間に生まれた。幼少期から仏門に入り、天台座主最雲²の弟子となるも、応保2年(1162年)に最雲が死去したため出家の機会を逃し、永萬元年(1165年)に15歳で元服した。同年に二条天皇³が死去すると、以仁王を天皇に擁立しようとする一派が現れ、以後後白河から疎まれるようになり、生涯親王宣下を受けることはなかった。その後、以仁王は八条院の猶子となったが、八条院は二条天皇・六条天皇⁴を支持するなど、院政を確立しようとする後白河とは対立していたため、以仁王も後白河から警戒されるようになっていった。二条天皇の親政を支持するなど後白河と対立していた平氏が、仁安3年(1168年)に高倉天皇が即位させて後白河との協調関係を築くと、以仁王は平氏からも警戒されるようになった。

安元2年(1176年)に建春門院⁵が亡くなると、清盛と後白河の間を取り持つ調整役が失われ、両者は対立を深めていくことになる。安元3年(1177年)には鹿ヶ谷事件で多くの院近臣が粛清された

1 久寿2年(1155年)に天皇に即位。後白河天皇。

2 堀河天皇の皇子。久寿3年(1156年)、天台座主に就任。

3 第78代天皇

4 第79代天皇

5 平清盛正室・時子の妹で、後白河との間に高倉を産む。

が、翌治承3年(1179年)6月に平盛子が、7月には平重盛が亡くなると、後白河は国政の主導権を取り戻すことを画策し、関白の藤原基房と連携して清盛に対抗した。平重盛の知行国であった越前を後白河の知行国にしたり、平盛子の所有していた荘園の支配を試みるなど、後白河側の挑発を受けた清盛は治承3年(1179年)11月、ついに後白河に対しクーデタを決行した。治承三年の政変である。清盛は藤原基房や太政大臣の藤原師長を解任するだけでなく、院政を停止して後白河を鳥羽殿に幽閉した。解任された院近臣が受領であった知行国の多くが平氏一門の手に落ち、平氏の知行国が日本の半分にも達したのはこの時点である(元木 2012)。平氏の勢力拡張にも目を見張るものがあるが、なによりも治承三年の政変は臣下が武力で王権を変更するという点で前代未聞の出来事であった。

以仁王は治承三年の政変の結果、所領である常興寺領(城興寺領)が没収されることとなった。ただし所領没収は以仁王の対平氏感情を悪化させたとしても、反乱を起こすほどの事件ではなかった⁶。以仁王が反乱を起こす契機となったのは、やはり皇位継承の問題であろう。翌治承4年(1180年)2月には言仁親王が安徳天皇として即位し、これにより以仁王の皇位継承は絶望的となった。以仁王は挙兵の準備を水面下で進めていくことになる。

以仁王の勝算はどこにあったのであろうか。以仁王の勢力基盤として最も重要なのは八条院の存在である。八条院は鳥羽院と美福門院から相続した膨大な荘園を所有しており、経済力という点では勿論、荘園を媒介にした人脈という点でも以仁王を支えることになった。後述する以仁王令旨を各地に届けた源行家は八条院蔵人であり、源頼政とともに以仁王陣営に加わった養子・源仲家や矢田義清⁷は八条院の判官代である(佐伯 2019)。

また後述するように挙兵直前期における平氏と寺社勢力は険悪な関係にあり、さらに治承三年の政変により平氏が多くの知行国を獲得し、平氏一門の家人を送り込むことで在地の有力者との間で摩擦が生じていた。これらの反平氏勢力を糾合することで挙兵を優位に進められると考えたのであろう。

3. 以仁王令旨

治承4年(1180年)4月9日、以仁王は源頼政らと謀って平家追討の令旨を発し、源行家が密使として諸国の源氏に伝えた。源頼朝に届けられた令旨の内容を『吾妻鏡』は以下のように伝える(田中 1994)。

下 東海東山北陸三道諸国源氏并群兵等所

応早追討清盛法師并従類叛逆輩事

右、前伊豆守正五位下源朝臣仲綱宣、奉

最勝王勅旨、清盛法師并宗盛等以威勢、起凶徒亡国家、恼乱百官万民、虜掠五畿七道、幽閉 皇院、流罪公臣、断命流身 (中略) 断百王之跡、切一人之頭、違逆 帝皇、破滅仏法、絶古者也、于時天

⁶ 以仁王の娘である三条宮姫宮は八条院の養女であり、いずれ八条院領を継承すると考えられていた(永井 2015)ため、所領問題で反乱を起こすには至らないと思われる。

⁷ 以仁王敗死後は木曾義仲に仕えた

地悉悲、臣民皆愁、仍吾為一院第二皇子、尋天武天皇旧儀、追討 王位推取之輩、訪上宮太子古跡、打
亡仏法破滅之類矣 (中略) 若於不同心者、准清盛法師徒類、可行死流追禁之罪過 (中略)

治承四年四月九日 前伊豆守正五位下源朝臣

令旨の中で以仁王は自らを「最勝王」⁸と称し、平氏の悪行を糾弾しつつ、自分が平氏を倒して新たに即位すると「勅」している。平氏の悪行として具体的に挙げられているのは治承三年の政変であり、以仁王は清盛が「皇院」を「幽閉」して後白河院政を停止するとともに、正統でない安徳天皇を即位させたことで「百王」の皇統を「断」ったと非難している。

また令旨本文における後白河の位置づけにも注目すべきである。以仁王の主要な勢力基盤は八条院であり、挙兵以前は八条院と以仁王は後白河と対抗していたにもかかわらず、令旨では八条院の養子であることでなく「一院」(=後白河)の「第二皇子」であることを強調している(元木 2012)。これは自らの皇位継承権の主張であるとともに治承三年の政変を糾弾するうえで、正統の天皇である後白河から不当に皇位を奪ったという図式を補強するために後白河の権威を強調する必要があったからであろう。

さらに以仁王は自身を「天武天皇」になぞらえて9「王位推取之輩」を追討すること、そして自身を「上宮太子」(厩戸王、聖徳太子)に例えて「仏法破滅之類」を滅ぼすことを宣言している。前者は大海人王子(天武天皇)が壬申の乱で大友王子を破った故事に倣って、正統の王が篡奪者を討つ構図に見立てたものであり、後者は平氏を仏敵と認定するもので、寺院勢力への合力の訴えを含意していると考えられる。平氏を仏敵と位置付けたのは単に味方を増やしたかったという理由だけでなく、王法仏法相依の考えに基づいている。すなわち「天皇と仏教は、天皇が世俗の権力を行使して仏教を保護し、仏教は宗教的な力で天皇を護持するという相互依存の関係」(佐伯 2019)にあるため、仏敵を滅ぼすことは正統な皇位継承者が即位するために重要な要素なのである。

平氏が仏敵であるという言説は仏教勢力にも受け入れられたようである。治承三年の政変を経て高倉院政が成立したのち、高倉天皇が厳島神社への御幸を行なおうとした際、これは慣例を無視したものであるとして園城寺・興福寺・延暦寺は猛反対¹⁰したが、清盛がこれを強行したという事件があった。以仁王令旨が「高倉一行が厳島社参から帰京した四月九日に出されている」(川合 2013)ことは、寺社勢力と以仁王の水面下での接触を感じさせる。

余談であるが、以仁王が「王位推取之輩」に例えた大友王子は壬申の乱に敗北した後に自害するが、その最期の地「山前」がどこに位置するかは未だ確定されていない。一説によると「山前」は粟津であると考えられている。のちに以仁王の遺児・北陸宮を擁して上洛した木曾義仲の死地が粟津であることを考えると皮肉なことである。

4. 以仁王、園城寺へ

8 「最勝王」の名称は経典「金光明最勝王経」に由来する。

9 以仁王と安徳、天武と大友は両者とも叔父と甥の関係に当たる。

10 延暦寺・園城寺・興福寺の衆徒が高倉院を奪取しようとしたため出発の延期を余儀なくされている。

5月10日頃から挙兵計画に関する風説が流れ始めると、清盛は14日に後白河院を藤原季能の館に移して周囲との連絡を断ち、翌15日には以仁王の名を「源以光」と改めたうえ土佐配流を決定した。同日に検非違使源兼綱¹¹・出羽判官源光長を以仁王追捕に向かわせるが、以仁王は園城寺へ逃亡した。以仁王の所在が園城寺にあることは、16日に園城寺長吏円恵法親王からの通報で発覚した。同日中に以仁王を京に迎えるための使者が園城寺に派遣されたが、園城寺大衆が以仁王に協力的であったこともあり、以仁王にあえなく追い返されることとなった(田中 1994)。

一方、同16日には平頼盛¹²が八条院に対して、彼女が育てていた以仁王の子女の引き渡しを要求し、八条院は命を奪わないことを条件に男子13のみを引き渡している。頼盛が八条院の条件を呑んで柔軟な交渉を行ったことから、八条院の力の大きさを垣間見ることが出来る。平氏政権は八条院を敵に回さないように注意し、あくまで以仁王1人を排除しようとしたのである(永井 2015)。

園城寺は延暦寺・興福寺との連携を試み、17日に両寺に合力を求める牒状を送っている。延暦寺には以仁王を支持する一派も存在したが、天台座主明雲は以仁王・園城寺に同心することなく、園城寺に対し返牒を出さなかった。他方、興福寺では反平氏の機運が高まり、東大寺など南都七大寺にも合力を呼びかけるほどであった。興福寺から園城寺への返牒は平氏の専横を厳しく糾弾する文章で知られているが、この文章を書いた僧こそが、のちに木曾義仲の右腕となる大夫房覚明であった。

5. 以仁王敗死

平氏は各寺院に対して説得を続けていたが、園城寺・興福寺に対する説得工作が進展しないことを受けて21日には園城寺に対する(23日からの)武力攻撃を決定した。園城寺討伐軍の大將10人は平氏一門9人と源頼政という構成であり、この段階でもなお源頼政が以仁王に与していることが露見していないことがわかる。しかし21日の夜中に源頼政は源仲綱・兼綱らを連れて園城寺へ向かった。頼政の謀反は京の人々に衝撃を与え、さらに同時期に南都の大衆が上洛するという噂や福原遷都の流言が広まったことで平氏は大いに浮足立ったという。

とはいえ情勢は以仁王にとって不利なものになりつつあった。延暦寺にも反平氏を唱える一派があったが、24日・25日に天台座主明雲が自ら説得に当たると、反平氏の衆徒も承伏し、延暦寺において以仁王に同心する勢力は姿を消した。25日の夜、ついに以仁王・源頼政らは園城寺を脱出して興福寺を目指すこととなった。園城寺を離れることになった理由としては延暦寺が敵方に回った事、そして園城寺の大衆が当初以仁王支持の姿勢を見せたとはいえ、延暦寺と同じく方針をめぐって内部対立が起きていた事が挙げられる¹⁴。翌26日の早朝にこれを知った平氏は直ちに追討軍を派遣し、追討軍は宇治の平等院で以仁王の一行に追いついた。頼政は以仁王を先に逃がすと、自らは殿となって平等院の手前にある宇治

11 源頼政の養子。

12 頼盛は八条院の別当を勤めていたことがあった。

13 のちに仁和寺の高僧として知られるようになる道尊である。

14 頼政が園城寺に入寺した時に率いていたのが「五十余騎」(『山槐記』治承四年五月二十二日条)であり、宇治橋の戦いで頼政が率いた軍勢が同じく「五十余騎」(『玉葉』治承四年五月二十六日条)であるため園城寺滞在を通して兵力を殆ど増やせなかったという見解がある(田中 1994)。ただし「騎」を騎兵の数と捉えると徒歩の僧兵の存在を別個に考える必要がある。

橋で追討軍を足止めすることにした。激戦が続くなか以仁王への合流を図った源兼綱は合流前に戦死し、頼政および嫡男の仲綱、養子の源仲家、仲家の子である仲光は平等院で自害した。以仁王は僅かな従者とともに興福寺を目指して逃げていたが、綺田まで至ったところで追討軍に追いつかれ、流れ矢に当たって絶命した。この時、南都の大衆は以仁王戦死の地から僅か数キロメートルを隔てた木津まで到着していたという（永井 2015）。

6. 以仁王令旨を受け取った勢力のその後

のちに鎌倉幕府を樹立する源頼朝も、京から平氏を追い出した木曾義仲も、以仁王令旨を受け取って直ちに兵を挙げたわけではない。頼朝のもとに令旨が届いたのは治承4年（1180年）4月27日であり、頼朝の挙兵は同年8月17日の出来事である。以仁王敗死後、平氏は源頼政の残党を追捕させる目的で大庭景親を東国に派遣しており¹⁵、大庭の下向という現実的な危険が迫っている状況のなかで頼朝は挙兵を決意したと考えられる。

義仲の挙兵はさらに遅れて9月である。挙兵の要因については源頼政の養子であった兄・仲家に連座して処罰されることを恐れたという説や、信濃に甲斐源氏が侵攻する情勢に乗ずる形で挙兵して令旨に応えようとしたという見解（元木 2019）があり、不明な部分も多いが、令旨を受け取ってから兵を挙げることについては慎重であったといえよう。義仲は寿永元年（1182年）には以仁王の遺児・北陸宮を手元で保護することに成功し、上洛後は北陸宮の即位を支持することになる。後白河は高倉の皇子である尊成親王を擁立しようとしていたため義仲と激しく対立した。最終的に尊成親王が後鳥羽天皇として即位することになり、義仲は後白河と通じた頼朝に討伐され敗死するに至った。後白河は以仁王の系統を皇位継承から排除することに成功したのである。

なお治承・寿永の乱においては頼朝や義仲といった河内源氏だけでなく、前述の甲斐源氏や美濃源氏・近江源氏等も反乱を起こしている。各地の源氏同士が争う例も多く見られ、この時期の内乱が源氏対平氏という単純な構図では表せないことを示唆しているが、その詳細は以仁王とは直接の関連がないため割愛する。

参考文献

『平氏政権の研究』第七章「以仁王の乱」（田中文英，1994，思文閣史学叢書）

『岩波講座 日本歴史 中世1』第三章「治承・寿永の内乱と鎌倉幕府」（川合康，2013，岩波書店）

『平清盛と後白河院』（元木泰雄，2012，角川選書）

『源頼朝』（元木泰雄，2019，中公新書）

『源頼政と木曾義仲』（永井晋，2015，中公新書）

『皇位継承の中世史』（佐伯智広，2019，吉川弘文館）

15 大庭は頼朝の追討を命じられたわけではないが、そう勘違いする可能性は十分考えられる。また伊豆の知行国主が源頼政から平時忠に変わることに對する北条氏らの不満も挙兵を促したであろう（元木 2019）。

超個人的木曾義仲論

源 義亮

【初めに】

皆さんは「木曾義仲」という人物をご存じだろうか。彼は平安時代末期に活躍した武将であるが、同時代の平清盛、あるいは源頼朝・義経兄弟と比較すれば知名度では劣るであろう。だがしかし、栄華を極めた平家を京の都から追い出したのは、実を隠そう木曾義仲なのである。私はそんな木曾義仲について、以下の以下の三部構成で語っていこうと思う。

第一部：木曾義仲の生涯

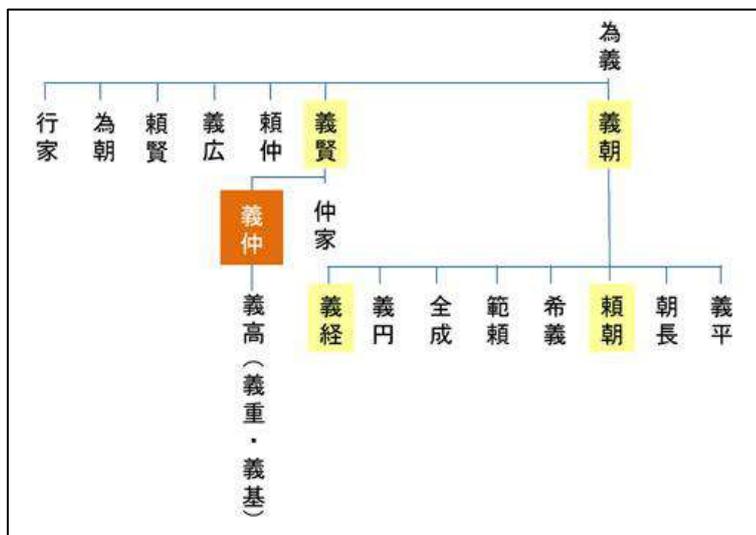
第二部：木曾義仲の魅力

第三部：木曾義仲のこれから

まず第一部では木曾義仲を知らない人向けに彼の生涯を簡単に記述する。すでに知っているよという人は読み飛ばしていただいてもかまわない。また第一部に関してはあくまで簡略版であり、義仲の生涯についてもっと知りたいという方には最後におススメの本を紹介する。続いて第二部では彼の魅力について言及する。最後に第三部ではこれまでの義仲を踏まえ、これからの木曾義仲を述べたいと思う。

【第一部：木曾義仲の生涯】

「木曾」と聞いて信州（長野県）を思い浮かべる人も多いと思うが、木曾義仲が生まれなのは武蔵国、現在の埼玉県比企郡嵐山町である。義仲は埼玉県生まれなのである。彼は正式には源義仲と呼ばれるが、ここでは一般的に有名な「木曾義仲」で統一する。ではなぜ彼は「木曾」を冠するようになったのか。それは彼の父である源義賢が実の甥である源義平（頼朝・義経の兄）に討たれたことに起因する。その時、義仲はわずか2歳。そんな義仲が畠山重能、斎藤実盛らの手を経て信濃の国の豪族である中原兼遠という人物のもとに託され木曾谷で育った。「木曾で育った若者」という意味合いで彼は木曾義仲と呼ばれるのである。



木曾で育った義仲が27歳になった時に転機が訪れる。以仁王の令旨である。打倒平家を掲げたこの令旨は義仲から見て叔父にあたる源行家によって各地の源氏に届けられた。主な勢力として甲斐の武田信義、伊豆の源頼朝、そして信濃の木曾義仲らが挙げられる。以仁王自身は戦いの中で討ち死にしてしまうが、この以仁王の令旨によって挙兵した義仲は市原の戦い、横田河原の戦い、俱利伽羅峠の戦い、篠原の戦いなどに連戦連勝、破竹の勢いで京の都に上洛し、平家を都から追い落とした。京の都から見て東よりまさに昇る朝日のごとく現れた義仲は、通称「朝日將軍」と呼ばれることになる。

上洛した義仲は都の警護を任されるも、数万の兵を統率しきれず都の治安維持に失敗する。これは義仲が上洛する過程で勝ち馬に乗ろうとして義仲についてきた勢力が多く、それらの勢力による乱暴狼藉が盟主としての義仲の責任になったという形である。また皇位継承問題にも介入したのも失敗談として挙げられる。だが義仲が次期天皇に推した北陸宮は亡き以仁王の子である。以仁王の令旨が無ければ、平家が都を去ることもなかったからだ。筋は通っている。結果的に皇位継承権は後鳥羽天皇へ渡った。この辺りから都での後白河院と義仲の不和はエスカレートしていき、とうとう後白河院は義仲に対する最後通牒を出した。その内容は「ただちに平氏追討のため西下せよ。院宣に背いて頼朝軍と戦うのであれば、宣旨によらず義仲一身の資格で行え。もし京都に逗留するのなら、謀反と認める」という、義仲にとって厳しいものであったが、これに対し義仲は「君に背くつもりは全くない。頼朝軍が入京すれば戦わざるを得ないが、入京しないのであれば西国に下向する」と答えた。これは公家である九条兼実をもってして彼の日記である玉葉の中で「義仲の申状は穏便なものであり、院中の御用心は法に過ぎ、王者の行いではない」と義仲を擁護するほど穏便な答えであった。しかしながら後白河院は自身の御所である法住寺殿を武装化し、義仲を挑発、追い詰められた義仲は遂に法住寺殿を襲撃することになる。この戦いで義仲は官軍相手に勝った、しかしながら結果的に頼朝には義仲討伐の口実を与える結果となり、法住寺殿襲撃から約2か月後、義仲は近江国で非業の最期を遂げることとなる。享年31歳である。以仁王の令旨を受けて挙兵した27歳からわずか4年であった。

なおこの義仲の最期に関しては日本史というよりも古典の授業の方でおなじみだろう。第二部で述べる義仲の魅力につながる要素が多いため、そちらの方で詳細は述べるようにする。

【第二部：木曾義仲の魅力】

このパートでは平家物語における「木曾最期」を中心に木曾義仲が持つ魅力について述べていくこととする。義仲の魅力は一言でいえば“非常に人間臭く情に厚い”ことである。普通の武士であれば家臣の前では気丈に振舞うのが常ではあるが、義仲は違う。それはまさに「木曾最期」の部分に表れている。

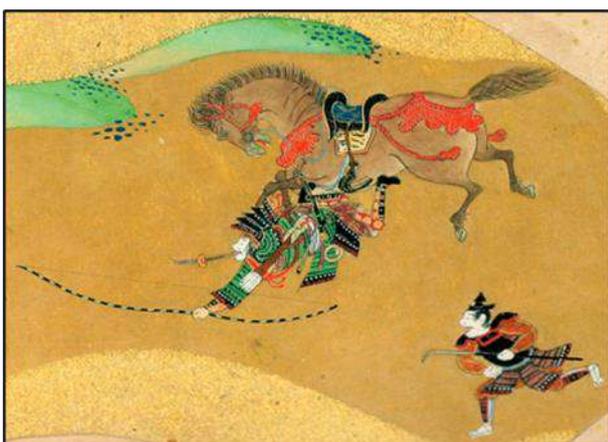
源義経らの上洛を受け宇治川方面の戦線は崩壊、普通の武士であれば潔く自害するか或いは落ち延びて再起を図ることだろう。義仲はこのどちらも選ばなかった。もう一つの戦線である瀬田方面に向かったのである。それはなぜか。義仲は最後の最後、乳母子（現代風に言えば竹馬の友）である今井兼平に会うために瀬田に向かったのだ。平家物語で二人の再会については下記のように述べられている。

「私（義仲）は六条河原で死を覚悟したが、お前（兼平）がどうしても心配で、多くの敵の中をかき分けてここまで来た」これに対し兼平は「本当にありがたいことです。実は私も瀬田で討ち死にすべきところ

を義仲様のことが心配でここまで参りました」と言う。まさに以心伝心なのである。この部分では義仲が家臣と主君という垣根を超えた友情を優先したことがうかがえる。

そして再開した義仲と兼平らは鎌倉の大軍を相手に最後の戦いを挑むことになる。100%勝つことの不可能な戦い、義仲はまさに兼平と一緒に死ぬことを選んだのである。その途中で巴御前は戦線離脱する。いや「させた」というのが正しいであろう。義仲は戦いの最中に巴御前にこう言う「お前は女だから逃げる。私が最後の戦いに女を連れていたといわれるのは嫌だ」これに関して私は、せめて女性である巴御前には生き延びてほしいと思ってわざと心にもないことを言ったのではないかと思う。実際問題、巴御前はその辺の武士よりもはるかに強いし、その強さを一番知っているのは義仲自身である。そして義仲には倶利伽羅峠の戦いでもう一人の女武者であり義仲の妾でもある葵御前を戦死させてしまったという思いでもある。葵御前は戦死させてしまった、せめて巴御前だけは生き延びてほしいというのが義仲の真意だったのである。この部分からは義仲の優しい一面がうかがえる。

そして最後の最後は義仲と兼平の主従二騎となり、兼平と一緒に死のうとするも兼平の最後の願いで名誉の自害をすることを選んだが、馬の脚が深田のぬかるみにはまり、敵を食い止めている兼平のことが心配で振り向いた瞬間、額に矢が刺さり非業の死を遂げた。これを見た兼平が日本史上屈指の壮絶な自害をして平家物語の「木曾最期」は終わる。



義仲が情に厚いというエピソードは他にもある。現在の石川県加賀市が主戦場となった篠原の戦いである。この時義仲軍の武将である手塚光盛（余談ではあるがあのマンガの神様、手塚治虫の先祖）が一人の平家軍の武将を打ち取った。一騎打ちの際、手塚は名乗りを上げたが相手は名乗らなかった。不思議に思った手塚は義仲のもとにその打ち取った武将の首を持ってきた。実はその武将こそが幼き頃の義仲を

木曾まで逃してくれた斎藤実盛であったのだ。訳あって当時は平家に属していたのである。命の恩人である実盛の首を抱えて義仲は人目をはばからず大号泣した。それも大勢の家臣が見ている前でである。その姿は現地の篠原古戦場で銅像になっている。酸性雨の影響だろうか、亡き実盛の首を抱えて義仲自身が本当に泣いているように見えるのである。



ここまで述べてきたように義仲は武士としての面子や誇りよりも、友情や愛情を優先する当時の武士としては異質の存在なのである。その異質さが義仲の持つ魅力であり、松尾芭蕉や新井白石、芥川龍之介、高畑勲など多くの文化人が彼のことを愛した。特に松尾芭蕉は熱烈に義仲のことを敬愛しており、弟子たちに自身の亡骸を義仲の墓の隣に埋葬してほしいと遺言するほどである。

だがしかしここまで魅力がある人物でありながら、その魅力があまり知られていないのが実情である。第三部ではこれまでの義仲に対する一般的なイメージを踏まえながら、これからの義仲について語っていかうと思う。

【第三部：木曾義仲のこれから】

まずこれまでの木曾義仲に関して一言で表現すると「不遇」という言葉がふさわしいであろう。では何をもって不遇と言えるのか、それは主にメディア露出面での不遇である。これまでテレビでは某局がかたくなに名前を出してくれないという事案もあった。また出版物に関しても、同時代の平清盛や源頼朝、源義経に関するものは多いが、木曾義仲に関するものは少ない。また恥ずかしい話ながら、木曾義仲に関してはネット上に情報がほとんどない、あったとしても細かく検索しないと出てこない。言葉を選ばずにいうのであれば、日本社会以上に木曾義仲周辺は少子高齢化が著しいのである。

このような木曾義仲ではあるが、近年風向きは確実に変わってきていると私は確信している。私事では

あるが木曾義仲の Twitter アカウントを開設して今年（2021 年）の 5 月で丸 10 年になる。あくまで個人でできる範囲ではあるが、木曾義仲における情報発信を私の Twitter アカウントに集約してきた。正直私自身は何の肩書も無いその辺にいるサラリーマンである。だがこの 10 年の中で木曾の知人や倶利伽羅峠古戦場を擁する富山県小矢部市など様々な木曾義仲関係のパイプができ、発信できる情報の量も質も充実してきた。まだオフレコではあるが年内には小説家である天野純希氏の長編小説の連載も始まる。また舞台や歌舞伎では比較的登場しており、演じた芸能人を通じて木曾義仲を知ってくれる人が、ここ 1～2 年は特に多い。某インド映画に義仲が倶利伽羅峠で使用したといわれる火牛の計を彷彿させる場面があり、インド映画ファンにも義仲に興味を持ってくれた人がいる。

そういった意味で木曾義仲の未来は明るいと思う。実際問題、若い世代にも木曾義仲のことを好きあるいは興味があると言ってくれる層は一定数いる。つまるところ今まではこちら側の情報発信力が弱かったのである。

【終わりに】

まずはここまで読んでくれた方に感謝を述べたい。書いていて我ながら拙い文才だなど思えてしょうがない。このエッセイをきっかけに木曾義仲に興味を持ってくれた人が 1 人でもいてくれるのであれば、私は嬉しい。

最後に木曾義仲に対して少しでも興味を持っていただいた方に対して木曾義仲についての学びやすいおススメの書籍を紹介させていただいた上で示させていただければと思う。それらを手にとってもっと知りたいという方がいるのであれば私の Twitter アカウントをフォローの上 DM を頂ければ個別に伝えようと思う。

・木曾義仲について学びやすいおススメの書籍

① 源頼政と木曾義仲 - 勝者になれなかった源氏 永井晋 中公新書



② 木曾義仲（読みなおす日本史）下出 積與 吉川弘文館



③ 源平武将伝 木曾義仲（コミック版 日本の歴史）水谷 俊樹・早川 大介 ポプラ社



・参考文献

源頼政と木曾義仲 - 勝者になれなかった源氏 永井晋 中央公論新社

院政 増補版-もうひとつの天皇制 美川圭 中央公論新社

木曾義仲（読みなおす日本史）下出 積與 吉川弘文館

平家物語 山下宏明・梶原正昭 岩波書店

完訳源平盛衰記 岸睦子 勉誠出版

挑発する軍記 大津雄一 勉誠出版

木曾義仲に出会う旅 伊藤 悦子 新典社

木曾義仲 「朝日将軍」と称えられた源氏の豪将 小川 由秋 PHP 研究所

木曾義仲のすべて 鈴木 彰（編集）・松井 吉昭（編集）・樋口 州男（編集） 新人物往来社

義仲と巴（ウェブサイト） 運営：富山県小矢部市商工観光課（義仲・巴プロジェクト推進班）

伝「木曾義高の墓」探訪記
—栃木県佐野市の木曾義高伝説—

りょうつう（東京大学木曾谷研究会）

Twitter @TownEar

令和3年5月

木曾義高の生涯

木曾義高（通称「清水冠者」）は木曾義仲の嫡男として承安3年（1173）に生まれたとされる。寿永2年（1183）、源頼朝の娘 大姫と婚姻し鎌倉に移った。婚姻とはいうものの、その実際は頼朝方への人質に過ぎなかった。寿永3年（1184）、義仲と頼朝は不和となり、義仲は頼朝方の手により瀬田で討死した。頼朝としては敵の息子である義高を生かしておくわけにもいかず、義高を処刑するように命じた。義高は自らの命が危ういことを察知し、元暦元年（1184）4月20日の夜に密かに鎌倉を脱出したが、翌日には露呈し、頼朝方の追手により4月26日に入間河原（狭山市）で討死した。享年12歳。

木曾義高の逃亡と討死について、『吾妻鏡』は次の通り記している。

四月廿一日

去る夜より、殿中聊か物騒す。これ志水の冠者武衛の御躰たりと雖も、亡父すでに勅勘を蒙り戮せらるるの間、その子として、その意趣尤も度り難きに依って誅せらるべきの由、内々思し食し立つ。この趣を昵近の壮士等に仰せ含めらる。女房等この事を伺い聞き、密々姫公の御方に告げ申す。仍って志水の冠者計略を廻らし、今暁遁れ去り給う。この間女房の姿を仮り、姫君御方の女房これを圍み郭内を出しをはんぬ。馬を隠し置き、他所に於いてこれに乗らしむ。人に聞かしめざらんが為、綿を以て蹄を裏むと。而るに海野の小太郎幸氏は、志水と同年なり。日夜座右に在って、片時も立ち去ること無し。仍って今これに相替わり、彼の帳臺に入り宿衣の下に臥し、髻を出すと。日闌て後、志水の常の居所に出て、日来の形勢を改めず、独り双六を打つ。志水双六の勝負を好み、朝暮これを翫ぶ。幸氏必ずその相手たり。然る間殿中の男女に至るまで、ただ今に坐せしめ給うの思いを成すの処、晩に及び緯露顕す。武衛太だ忿怒し給う。則ち幸氏を召し禁しめらる。また堀の藤次親家已下の軍兵を方々の道路に分け遣わし、討ち止むべきの由を仰せらると。姫公周章し魂を鎖しめ給う。

四月廿六日

堀の藤次親家郎従藤内光澄帰参す。入間河原に於いて志水の冠者を誅するの由これを申す。この事密儀たりと雖も、姫公すでにこれを漏れ聞かしめ給い、愁歎の余り、獎水を断たしめ給う。理運と謂うべし。御台所また彼の御心中を察するに依って、御哀傷殊に太だし。然る間殿中の男女多く以て歎色を含むと。

—吾妻鏡

義高が討死したことを聞いて妻の大姫（当時弱冠）は大いに悲しみ、食事を取れなくなってしまった。同年6月27日には、義高を討って大姫を悲しませたとして、堀藤次親家の郎党 藤内光澄が処刑されている。

歴史の波に翻弄され婚約者 大姫と別れ弱冠12歳でこの世を去った木曾義高の悲劇的な人生は、御伽草紙の題材とされるなどして人口に膾炙されてきた。最近では2022年大河ドラマ『鎌倉殿の13人』で市川染五郎氏が木曾義高を演じることが発表され話題となっている。

佐野にある「木曾義高の墓」

前述の通り、木曾義高は入間河原で討たれたというのが通説であり、鎌倉市の常楽寺に「木曾塚」という塚がありそこが木曾義高の墓所とされている。

ところが、**栃木県佐野市にも「木曾義高の墓」があるという**。佐野市に残る伝承は以下の通りである。

殺されたのは、身代わりにされた宇野平八という者で、義高は名越弥三郎ら四人の供と連れ立って、**無事に落ち延び、佐野基綱を頼って下野国岩崎村（三好・岩崎）に来た**。基綱から厚遇を受け、後に基綱の娘をめとり、**佐野越前守義基と改め、西佐野殿と称し、佐野家に仕えた**。文治二年（1186）基綱の父有綱が戦死すると、源頼朝は義高の行方を捜してきた。基綱は、下野、上野の武将53人の協力を得て、ひそかに義高を下野一の宮（宇都宮）へ従者ととともに移した。頼朝が正治元年（1199）亡くなり、その後、実朝が鎌倉幕府第三代将軍に就くと、下臣の頼経に義高の所在を捜すよう命じた。頼経は全国をまわって、下野国一の宮にいることを確かめ報告した。ここにおいて、実朝と義高は過去のことを水に流して和睦し、常陸国（茨城県）新治郡と二万石が与えられた。義高は岩崎城に住んだが子義持が成人すると後を継がせ、清水城へ移り、晩年は山形御所の入りに館を構え、如法寺を建てて祖先の霊を弔った。清水家及び岩崎家の祖といわれ、御廟（墓）が御所の入にある。

一田沼町史

……。

そんなわけあるか、と思わせられる内容である。まず、義高が入間河原で討死していなかったとしたら、**大姫は悲しんだだけ損である**。そればかりか、**義高を討って大姫を悲しませたかどで処された堀藤次親家の郎党 藤内光澄が報われないでしょうに**。

この伝承が真実だとして、**なぜ佐野家を頼ったのだろう**（一般的には、嵐山や大胡を目指している途中に入間河原で討たれた、という説が浸透している。佐野基綱が助けてくれるアテはあったのか？）、**紛らわしいから弟と同じ名前にするなよ**（義仲の三男 義基は沼田に落ち延びたという）、などと疑問やツッコミが沸いてくるが、**とにもかくにも佐野市に現実に「木曾義高の墓」があるというのだから、栃木県内在住の筆者としてはとりあえず行ってみて自分の目で確かめるしかなかるう！**

両毛線経由で佐野駅へ。駅前でレンタサイクルを借り、小雨がぱらつくなか、**木曾義高＝岩崎（佐野）義基伝説**の残る旧田沼町へ向かった。

岩崎八幡宮

住所：佐野市岩崎町1682-1

まず訪れたのは岩崎八幡宮である。岩崎八幡宮は、岩崎家の居城**岩崎城跡**に位置すると伝わる。入間河原から落ち延びた木曾義高はまずこの地に住んだという。

来訪時、入り口はイノシシ除けの柵で閉ざされており、物々しい雰囲気であった。来訪者が自分で開錠して入ってよさそうであり、成人の足腰なら乗り越えられなくもない柵だったものの、柵を越えることはやめておいた。岩崎八幡宮からしてみれば、**私は亥ではないものの異ではあるし何なら夷である**。むやみに侵入するのはやめようと思い、写真を撮るカメラの取めたのち門前で引き返した。

なお、『田沼町史』によれば、岩崎八幡宮の由縁は次の通りである。義高（義基）の嫡子木曾左馬助義持が、義仲が兜の中に収めていたといわれる応神天皇の御像を奉持してきた。義持の嫡子孫左衛門がこの地に岩崎城を築いた際、城の鬼門にその御像を祭って岩崎家の氏神とした。これが岩崎八幡宮の始まりだという。



報恩寺

住所：佐野市山形町 1 1 7 8

続いて訪れたのは臨済宗の寺院 妙光山報恩寺である。報恩寺は古くは如法寺といい、義高(越前守義基)が義仲の霊を弔うために元久元年(1204)に建てたという。筆者が見学した限りでは、境内に木曾義高との関連を示す史跡は見当たらなかった。木曾義高関係の史跡というよりは、**天徳寺宝衍こと佐野房綱**(佐野家 15代当主 佐野昌綱の弟)の**墓所**であることで有名な(写真右下)。



岩崎義基の子孫 岩崎弥右衛門が収集・著述したとされる「清水城及び佐野由来の覚」には、次の通り記されている。

- 一 徳音寺・如法寺開基、西佐野越前守儀(義)基、同年に山形如法寺御取立、御廟山形に有、
- 一 清水城及び佐野由来の覚

田沼町史によれば、「清水城及び佐野由来の覚」は、「岩崎弥右衛門の先祖が佐野家のためにいかに働いたかを証明しようとしたもので、大部分は資料価値が乏しい」とのことである。とすると、この資料からは、木曾義高が如法寺(報恩寺)を建てたかどうか、岩崎義基なる人物が如法寺創建に携わったかも断言できない。

ただ、天徳寺宝衍(佐野房綱)がこの地に葬られたことから分かるように、**報恩寺は佐野家との関係性が深い**。天徳寺宝衍は報恩寺に葬るよう遺言したというところをみると、佐野家中で報恩寺は特殊な地位を占めていたのではなかろうか。



いざ、「木曾義高の墓」へ

住所：佐野市山形町 1 1 1 4

報恩寺の北西の山中に「木曾義仲の墓」はある。蕎麦屋「御所ノ入」の看板を目印に進み、右写真中央の道を直進していく（この蕎麦屋「御所ノ入」はインターネット上で好評価を博しており是非訪れたい店なのだが、筆者が現地を探訪した木曜日は定休日だった！ リサーチ不足を悔やむばかりである）。Google ストリートビューにもないような細い道を登っていくと、数軒の民家があり（この付近が木曾義高の「御所」の跡地らしい）、その裏手の杉林の中に「木曾義高の墓」がある。

案内板や石碑の類はなかった。やや開けた林中に「八幡大神」の祠があり、その左右に五輪塔があった。中央に聳え立つ一本の杉の木が雰囲気を出していた。報恩寺のホームページによれば、「造立年代は記銘がなく不明ですが、石質や笠の反り具合、重厚感のある全体の感じから、鎌倉時代のものでしょうか。」とある。

御所ノ入という地名及び御所跡の伝承、鎌倉時代のもものと伝わる御廟（次頁）がそろっている以上、**誰かしらの有力者がこの地に住み、この地に葬られたと推測できる**。その「有力者」が木曾義高であった、という説を積極的に支持する良質な資料はない。ここからは全くの憶測に過ぎないが、岩崎義基などの岩崎家黎明期の者の墓であるとみるのが無難だろうか。





清水城

住所：佐野市吉水町739

案内板によれば、安貞2年(1228)、佐野国綱(基綱の子)が岩崎義基のために築いた城である。以降岩崎家が代々居住したが、永正年間(1504-1521)に義基から数えて12代目の岩崎左馬介重長が岩崎城へ移動し、大永2年(1522)に本城は佐野秀綱(佐野家12代目)の居城となったという。「清水城及び佐野由来の覚」によれば、佐野秀綱入城の際に地名を改め、吉水城とした。周囲には家臣の屋敷が数多く建っていたらしい。

現在は本丸跡地に興聖寺が建つ。本丸(興聖寺)周囲には堀・土塁と思われる構造物が現存している(次頁上)。「坂東の城郭」好きであれば、一目で「ふふーん、ここは城跡だな」と分かるはずである。山門(次頁下)付近には枡形が往時の姿を残している。また、古絵図によれば、北二の丸、南二の丸、三の丸があったらしい。

縄張り自体は立派であるが、立地は必ずしも戦闘向きではない。秋山川と旗川に挟まれた微高地に位置しており、水を用いた天然の要害であったといえなくもないが、清水城の東に控える大規模な山城「唐沢山城」と比較すると、内政・平時の居住の場としての意味合いが大きかったものと推測される。

それにしても「佐野国綱が岩崎義基のために築いた」という記述には違和感がある。当主が臣下のために城を築く、というのが当時よくあったことなのかどうか。事実としては、佐野国綱が城を築き城代として岩崎義基を指名したということなのだろうが、案内板はいかにも「木曾義高=岩崎義基説」を支持しているかのような書きっぷりである。ただ、**岩崎義基が佐野家当主から城を築いてもらえるほどの有力者と「されている」ことには意義がある。岩崎義基をはじめ、岩崎家が佐野家の中でそれだけ重要な地位を占めていたことを示唆する所見ではなかろうか。**

また、気になるのは「清水」という地名の由来である。木曾義高が「清水冠者」と呼ばれていることと関連するのではないかと思う読者もいることだろう。文献資料に「清水」「吉水」の地名が出現するのは鎌倉時代以降であり清水城築城前にこの地域がどのように呼称されていたかを知る由はない。ただ、『田沼町史』によれば、吉水町では湧水が豊富に得られたためこの水利を利用して清水城が築かれたという。とすると、単純に湧水が豊かだから「清水」と呼ばれるようになったと考えた方がシンプルだろう。もちろん、偶然とはいえ、清水冠者の子孫を名乗る岩崎家が清水城に居住したというのはロマンがあることだ。





伝説の由縁は…

木曾義高＝岩崎義基説は資料的裏付けが乏しく、伝承の域を出ない。

筆者が「田沼町史」を用いて検索した限りでは、木曾義高＝岩崎義基説を支持する文献資料としては、岩崎弥右衛門が岩崎家の正当性を主張するために記した「清水城及び佐野由来の覚」があるのみであった。同資料には次の通り記されている。

一清水ノ城、元祖は鎌倉西ノ御門二ノ御所より、元暦元年三月十一日に下野へ赴キ、岩崎に住ス、依之御門と云、其以後山形ノ御所に移り、御住居、又候清水ノ城御取立御住居被成、御子孫相続ク。

※元暦元年は4月16日から始まる点からも、本資料の信憑性を疑わざるを得ない。

この資料から推察するに、**木曾義高＝岩崎義基説は岩崎弥右衛門ら岩崎家による僭称が広まったものではなかろうか。**岩崎家は佐野家中で重要な地位を占め、「西佐野家」と呼ばれていた。天正8年(1580)に記された『佐野武者記』は、佐野宗綱時代の佐野武士団約200名の名簿であるが、この中にも山上道牛ら佐野四天王とならんで「御一族 岩崎左馬助春信」「同 岩崎平次重久」とある。

また、岩崎家には「左馬助」を名乗っている武者が多い(岩崎左馬助義持：義高の子、左馬助重長：清水城の項を参照、左馬助春信：上述)。これも木曾源氏の正当な子孫であることを主張する意味合いがあるだろう(木曾義仲は左馬頭を名乗っていた)。

「佐野国綱が岩崎義基のために築いた」という由緒が公然と残っていることを踏まえると、**佐野家本家も木曾義高＝岩崎義基説を悪くは思っていなかった(黙認していた)と思われる。**というより、佐野家本家としても、**岩崎家が木曾家の末裔である、としたほうが大きな利益を得られたのではないか。**佐野家と岩崎家は互いに養子を迎え合い血縁関係を保っていたという。また、一部の研究者は、戦国佐野家は岩崎家の系統から出た、と主張している。**佐野家が岩崎家(すなわち、木曾源氏)の流れを汲んでいることは自らの権威付けを進めるうえで意味があったと考えられる。**

今後の課題

佐野家・岩崎家に関連する文献資料の調査をすすめることで、木曾義高＝岩崎義基説について論考を深めたい。

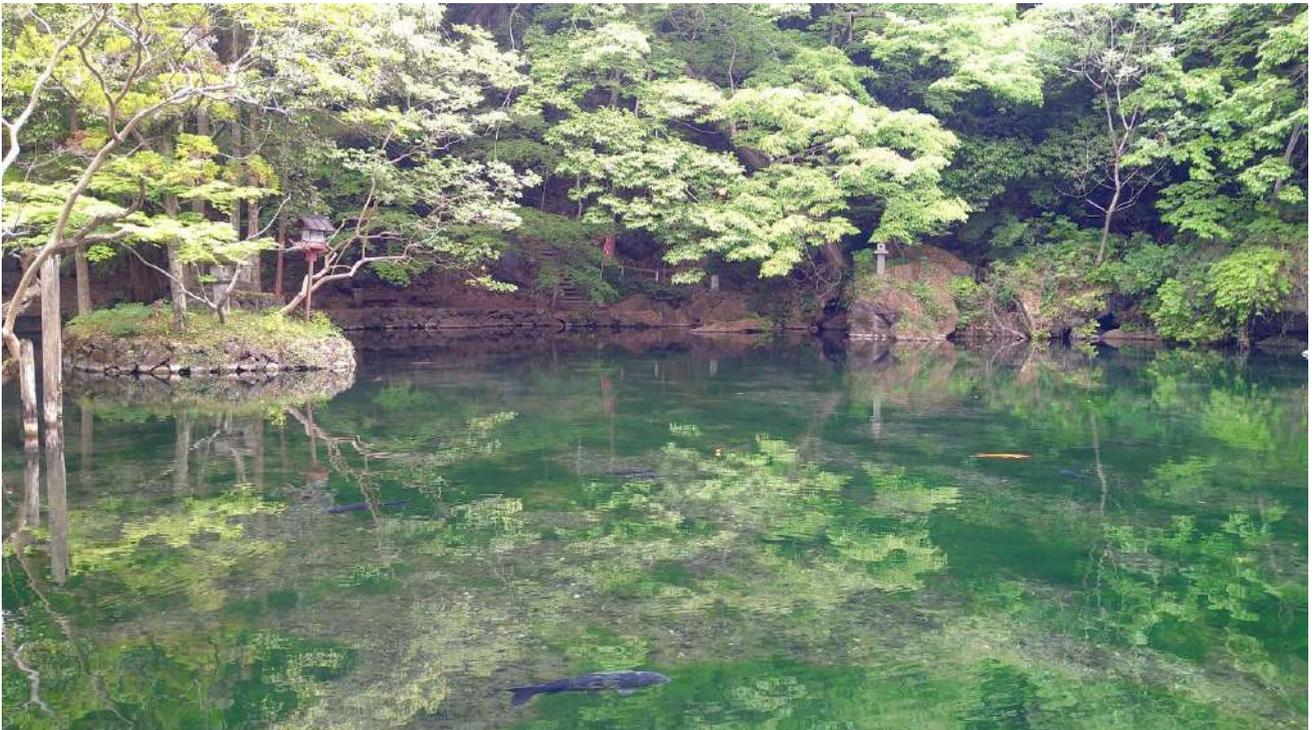
また、栃木県内の別の市町村にも木曾義高伝説が残る。他の市町村における木曾義高伝説について調べたり、佐野市の伝承と比較したりしてみても面白い。旧下野国域における木曾義高観を推察できるかもしれない(歴史学というよりかは民俗学の範疇かもしれない)。

まとめ

- 木曾義高は木曾義仲の嫡男。源頼朝の娘大姫と婚姻していた。頼朝と義仲が不和となったとき、義高は頼朝の命により入間河原で討たれ、鎌倉に葬られた（通説）。
- 佐野市旧田沼町には、木曾義高は無事落ち延び、岩崎義基と称して佐野家の家臣となったという伝承があり、墓や一族の居城跡が今に残る。
- 「木曾義高＝岩崎義基」説は資料的根拠に乏しい。後世に岩崎家が僭称したか。
- 佐野家も岩崎家の僭称を黙認していたか。

※取材は、緊急事態宣言発令時を避けています。また、マスクを着用の上、単独で実施しています。

現地を訪れる場合には、栃木県ならびに周辺地域の状況を考慮の上、マスクを着用し、「三密」を回避するようにしてください。



おまけ：出流原弁天池

最近、SNSで話題になっている美しい池。石灰岩からの湧水は、名水百選に指定されている。

住所：佐野市出流原町1117

「木曾福島合戦」を再考する

著者 有馬 武一

序説：通説への疑問

戦国時代末期の天正12年(1584年)、いわゆる「小牧・長久手の戦い」に伴う豊臣方と徳川方の全国的な対立において、木曾は最前線に位置していた。当時木曾一円を支配していた木曾義昌は、天正10年以来徳川家康に従属していたのであるが、豊臣と徳川との間の戦争が開始する頃には、家康を裏切って豊臣秀吉の側についていた。しかし、義昌が治める木曾地域の北に接する松本平と、東に接する伊那谷とは、敵対する徳川方の勢力の支配下に置かれており、天正12年は木曾氏が両地域からの軍事的圧力を受け続ける年となる。

江戸時代の歴史書である『木曾考』は、そのような中で松本の小笠原貞慶の軍勢が木曾の防衛を突破し、木曾氏の本拠地である木曾福島にまで進攻して一帯を焼き払ったことを記している。本稿ではこの戦いを『木曾考』の見出しに倣って「(木曾) 福島合戦」と呼称し、詳細に検討していこうと思う。

なお、本稿に登場する地名を記入した地図を末尾に添付するので、読解の際の参考にされたい。

木曾氏は当時、北方の守りを鳥居峠の峻険な地形に頼っていたというのが定説であるが、この戦いに際して小笠原軍は特筆すべき抵抗を受けることなく峠を突破し、木曾福島へと至っている。このことにつき、『木曾考』の「妻籠々城并福島合戦」の章では次のような説明が為されている。

従来、木曾氏は北方の松本平からの敵の襲来に際して、まず木曾の北境にあたる贄川で狼煙を上げ、それを見て鳥居峠、更に日義村の山吹山で狼煙を順々に上げていくことで、南にある木曾氏の本拠地・木曾福島まで敵襲の情報を伝えていた。しかし、天正12年の小笠原貞慶の侵攻に際しては、贄川に在番する木曾氏の家臣が敵の小笠原氏に内通しており、自ら小笠原軍を領内に引き入れたため、贄川で敵襲を知らせる狼煙が上がらず、木曾義昌は敵の侵攻にしばらく気づくことができなかった。そのため、木曾福島からの援軍が遅れて到着した時には、敵は既に鳥居峠を越え、宮ノ越まで進出してきていた。宮ノ越で木曾軍を破った小笠原軍は、そのまま木曾福島まで進撃し、福島の前や木曾義昌の居館を焼き払った。福島では古橋などの場所で激戦が展開されたという。その後、木曾の他地域からの木曾側の救援軍が集まってきたことや、自軍にも無視できない損害が出ていたことを踏まえて、小笠原軍は木曾から撤退した¹⁶。

なお、『木曾考』以外の史料によれば、木曾軍が木曾福島城と思われる山城に籠城し、陥落寸前まで追い込まれている様も見て取ることができる¹⁷。

以上が木曾考から確認できる福島合戦の概要であり、同時に史料が少ないこの合戦についてのほぼ通説的な理解となっている。多くの先行研究は、贄川氏らの裏切りで狼煙が上がらなかったことが、小笠原軍による奇襲の成功と木曾福島乱入に繋がったとする『木曾考』の逸話を無批判に受け入れている。

¹⁶ その後木曾氏が逆襲して深志城を奪ったとする記述が続くが、非現実的であり、木曾氏を持ち上げるために捏造された内容と思われるので、本稿では詳細には検討しない。

¹⁷ 『信濃史料 卷十六』, p.212、『岩岡家記』。

また、この逸話を受け入れる前提として、木曾氏の領国防衛に関する通説的な理解が存在している。その内容は、木曾氏は松本平方面からの敵の侵攻に際して、贄川の狼煙台からの通報で敵襲を察知した上で、木曾福島から軍勢を出撃させ、鳥居峠で迎え撃っていた、というものであり、福島合戦においてもこのパターンが取られたという前提が自明視されている¹⁸。

しかし、筆者はこの狼煙台の逸話や、その前提となっている木曾氏の領国防衛に対する理解に関して、直感的に違和感を覚えた。

まず、逸話に関しては、次のような違和感を抱いた。そもそも鳥居峠にも狼煙台が設けられているのであるから、贄川勢の裏切りによって贄川で狼煙が上がらず、なおかつ峠が直接攻撃を受けた場合であっても、峠の狼煙台からの通報で木曾福島への通報は成り立つのではないだろうか。見通しの良い峠であるから、敵を早めに発見して狼煙を上げることは容易いであろう。

また、木曾氏の領国防衛の通説に関しては、次のような違和感を抱いた。確かに平時に突然敵が攻めてきた場合であれば、このように木曾福島から軍勢を派遣して対応するかもしれない。しかし、緊張した戦時であれば、初めから木曾防衛の要である鳥居峠などに軍勢を駐屯させ、国境の守りを固めている方が合理的であろう。

小牧・長久手の戦いが続く天正 12 年はまさしく戦時中であり、初めから国境を固めていたとしても不思議はない。そうであれば、贄川勢の裏切りで敵が直接鳥居峠に攻め寄せたとしても、守備隊で敵の攻撃を防ぎつつ、峠の狼煙台から木曾福島へ通報し、増援を求めることができたはずだ。

本稿では、この疑問をより論理的に解決するために、木曾福島合戦にまつわる史料や先行研究を深掘りし、納得のいく解釈を導き出すことに努める。



↑鳥居峠からの展望。奈良井・木曾平沢の集落を見通すことができ、敵方の警戒にはもってこいである（2019年8月11日・筆者撮影）。

小笠原貞慶の木曾侵攻までの経緯¹⁹

本稿のテーマである木曾福島合戦について本格的に検討を開始していく前に、まずはそこに至るまでの大まかな歴史の流れを確認しておきたい。

天正 10 年（1582 年）6 月 2 日、本能寺の変で織田信長とその嫡男信忠が倒れた。この時信濃国は、同

¹⁸ 『木曾福島町史 第一巻』, p.153、『木曾福島町史 第三巻』, p.989、『武田遺領をめぐる動乱と秀吉の野望』, pp.140-141。

¹⁹ この章は『木曾福島町史』、『天正壬午の乱』、『武田遺領をめぐる動乱と秀吉の野望』、『木曾伊予守義昌』などを元に、なるべく史実として確実性の高い事柄に絞って概説。

年 3 月に完了した織田氏の甲州征伐によって旧支配者の武田氏が滅ぼされ、新たに織田氏の支配下に入ったばかりであったので、信長父子の突然の死によって大混乱が巻き起こった。新支配者たる織田家が動揺し、情勢が不安定になった信濃国は、この機に乗じて信濃国内での勢力伸長を狙う在地の国衆や、かつて武田氏の侵攻で失った旧領を取り戻す機会を待ち続けて国外に潜んでいた勢力、そして信濃への領土拡張を狙う周辺の大国などが入り乱れる戦乱の巷と化した。

そのような中で、かつて甲州征伐に協力した褒賞として織田信長から筑摩・安曇郡を与えられ、現在の松本にあたる深志の城で、新領土たる両郡を統治していた木曾谷の領主・木曾義昌も、再び戦乱の渦に巻き込まれていった。この時、筑摩・安曇郡の奪還を悲願としていたのが、かつて同地を武田信玄に追われた旧領主・小笠原長時とその一族であった。両郡に散在する小笠原氏旧臣たちの要請もあって、長時の弟にあたる貞種は、越後の上杉氏の支援を受け、本能寺の変から間もない 6 月末～7 月頭の時期に深志城を攻撃し、これを木曾氏から奪還することに成功した。敗れた木曾氏は手に入れて間もない新領土を放棄し、泣く泣く木曾へと引き上げることとなった。

しかし、貞種が上杉氏の傀儡と化していたことに不満を覚えた小笠原旧臣は、代わりに長時の息子にあたる貞慶を迎え入れることを決断する。貞慶は徳川氏の支援を受けて深志城を攻撃し、激戦の末に貞種を追放することに成功した。こうして、貞慶を当主とする小笠原氏が筑摩・安曇郡の中心部を取り戻し、深志城を拠点に一带を支配することになったのである。

信長から貰い受けた深志城および筑摩・安曇郡の領有を諦めきれないのが木曾義昌である。以降、深志奪還を目指す義昌と、同地の保持ならびに勢力拡大を狙う貞慶は、両者の勢力圏の境界である塩尻から本山あたりまでの地域において、幾度となく軍事衝突を繰り返すこととなる。

徳川氏の支援によって深志を奪還した小笠原貞慶であったが、甲斐・信濃を狙う相模の北条氏の攻勢が強まると、間もなく徳川との手を切り、北条氏に従属することとなる。一方、木曾義昌は本能寺の変後の当初から北条氏に同調して勢力拡大を狙っていたが、北条氏と敵対していた徳川氏から、筑摩・安曇郡の安堵を前提として調略を受けたため、これに応じて徳川氏に従属した。

しかし、その約束が果たされぬうちに徳川と北条が停戦を結び、信濃から北条軍が引き上げると、敵中に孤立する形となった小笠原氏も徳川に降伏してしまう。徳川氏も小笠原氏を特に咎めることなく、現状の筑摩・安曇郡の支配状況をそのまま認める形で従属させてしまったので、木曾義昌に筑摩・安曇郡を宛てがう約束は実質的に反故になった。

そのような中で、豊臣秀吉が織田政権の中での地位を急速に高め、木曾谷に隣接する美濃へも勢力を伸ばしてくる。徳川家康と豊臣秀吉の対立も深まってきた天正 12 年の初頭、木曾義昌は家康から離反し、秀吉に従属することを決断する。秀吉の力を頼って筑摩・安曇郡を小笠原貞慶から奪回することが、その大きな目的であると考えられる。

しかし、この寝返りは木曾氏の家臣団の中に大きな動揺をもたらしたようだ。同年中、木曾義昌は何らかの理由によって、当時贄川に在番していた家臣の奈良井義高を殺害している。同じく贄川に在番していた贄川又兵衛・贄川監物・千村丹波守らはこのことを恨んで木曾義昌に逆心を抱き、小笠原貞慶に内通した。

奈良井義高が義昌に殺害された理由は、義昌が豊臣方へ寝返る際に意見対立があったこと、もしくは徳

川方である小笠原貞慶への内通を疑われたことなど、いずれにしても寝返りに関わる問題であろうというのが通説的見解である。鳥居峠という天然の要害に守られた木曾福島とは異なり、奈良井・贄川は小笠原貞慶の本拠地である深志と奈良井川沿いに一本道でつながる土地であるから、寝返りによって木曾氏と小笠原氏が再び敵対すれば、最前線となって兵火に見舞われるリスクがある。そんな彼らが寝返りに反対し、更には小笠原氏に内通したとしても全く不思議ではない。

そして、この機に乗じた小笠原貞慶が、内通者の協力を得て木曾谷に侵攻したことが、冒頭で挙げた福島合戦の生起に繋がるわけである。同時に、小牧・長久手の戦いに関連して勃発した豊臣方との軍事衝突の一環として、徳川家康が木曾への攻撃を企図し、従属下の小笠原氏に侵攻を指示したことも、小笠原氏の木曾侵攻の主な理由であろう。

なお、この年、小笠原氏の木曾攻撃と前後して、徳川方の武将が9月に伊那から木曾の妻籠方面に侵攻し、激戦の末に木曾軍によって撃退されたことも確認されている。こうした動きは、家康の指示の下で連携して行われた一連の作戦行動であったと考えられる。

木曾義昌が豊臣方に寝返ったのは、天正12年3月ごろのことであると考えられ、史料では3月26日にそのことを初めて確認できる²⁰。その後、小笠原貞慶が贄川の諸士に調略の手を伸ばしているのが、4月1日および2日の史料から確認される²¹。3月中に寝返りに関する議論がもつれ、木曾義昌が奈良井義高の謀反を疑い、殺害するに至り、義高と近い立場にあった贄川氏らの離反が加速し、小笠原貞慶と完全に内通するに至ったと考えるのが妥当であろう。

なお、この時小笠原貞慶に内通したうちの一人である贄川又兵衛は、福島合戦において小笠原軍の嚮導を務めたものの、鉄砲弾に当たって戦死したことが、『木曾考』ほかの史料から確認できる。

福島合戦はいつ起きたか

では、本題である小笠原貞慶の木曾侵攻と木曾福島合戦は、天正12年の中でもいつ頃の出来事だったのであろうか。これについて根拠となる史料を整理していきたい。

まず、文書の中でこの戦いについて触れているのが、①天正12年6月25日に豊臣秀吉から木曾義昌にあてて送られた文書（『信濃史料補遺上』, pp.635-636）と、②天正12年7月3日に豊臣秀吉から木曾義昌にあてて送られた文書（『豊臣秀吉文書集 二』, 1127, p.54）と²²、③天正12年8月5日に徳川家康から保科正直にあてて送られた文書（『信濃史料 卷十六』, pp.200-201）、そして④天正12年10月5日に徳川家康から小笠原貞慶にあてて送られた文書（『信濃史料 卷十六』, p.212）の四点である。これらの文書の内容について、順を追って詳細に見ていく。

①の文書は、6月19日に木曾義昌が送ったという書状に対して、豊臣秀吉が25日に目を通し、その日のうちに返事をしたものである。この中で秀吉は、小笠原貞慶が「去十三日」、すなわち6月13日に

²⁰ 『武田遺領をめぐる動乱と秀吉の野望』, pp.118-119。

²¹ 『信濃史料 卷十六』, p.148。

²² 『木曾伊予守義昌』, pp.106-107。

鳥居峠に来襲したことと、同時に伊那口でも徳川勢が蠢動していることを理解した上で、森忠政の率いる援軍を派遣する意思を表示している。内容から推察するに、19日付の義昌の書状は、小笠原軍の鳥居峠の来襲および、伊那口での徳川軍の動きを伝えるものだったのであろう。

②の文書は、6月24日に木曾義昌が送ったという書状に対して、豊臣秀吉が7月1日に目を通し、3日に返事をしたものである。この中で秀吉は、6月13日に木曾谷に来襲した敵が撃退されたことを確認した上で、森忠政の援軍を妻籠まで派遣することを伝えている。

③の文書は、徳川家康が保科正直に対して、菅沼定利の指揮下に入って木曾に出兵することを指示しているものである。

この文書の冒頭において、徳川家康は「今度小笠原貞慶、至木曾谷中被相格、悉放火之由候」と述べている。これについて、冒頭の「今度」をどのように解釈するかで、大きく意味が変わってくる。「今度」を「今度遊びに行く」のような近未来の意味だとするならば、小笠原貞慶がこれから木曾に侵攻して放火しようとして計画しているので、家康が保科正直にも時期を合わせて木曾へ侵攻するように促しているということになる。しかし、「今度」を「このたび」、「今回」のような近過去の意味だとすれば、既に小笠原貞慶は木曾谷に侵攻して焼き払ったということになる。『信濃史料』では後者の解釈を取っているが、筆者は前者で取るべきであると考えているので、後ほど先行研究を比較してこの点をよく論じようと思う。

④の文書は、小笠原貞慶からの木曾侵攻についての報告に対して、家康が返書を送っているものである。

この文書には「殊に凶徒山城に楯籠り、程なく落居たるべきの由、本望この事に候」とあり、木曾氏の城が陥落間近であることを聞いた家康がそのことを喜ぶとともに、油断が無いように戒める内容となっている。小笠原貞慶が結局木曾氏の城を陥落させることができずに引き上げたという情報は、この時点で未だ家康に伝わっていないということが、この記述から見て取れる。すなわち、この文書はまさしく、小笠原貞慶が木曾攻撃の真っ最中に送った戦況報告に対して、家康が返事をしたものであると言える。石川数正からの伝聞であるという冒頭の記述も、情報の新鮮さを感じさせる。

それゆえ、この文書が言及している小笠原貞慶の木曾侵攻は、9月末から10月頭の頃に行われたものであり、その際に貞慶が木曾福島町の町まで攻め込み、放火・攻城を行ったという史実があったことが確定的に見て取れる。



↑小笠原軍に焼かれた木曾福島の木曾氏居館の跡地は現在大通寺になっている（2019年8月12日・筆者撮影）。

この文書につき、家康が貞慶の同年6月または8月の戦功を讃えたものとして解釈する研究もあるが、そのような理解には難があることについては、後で詳しく論じていく。

文書以外の史料としては、後世の編纂物になるが、『木曾考』、『岩岡家記』などのほか、『寛永諸家系図伝』の中の諏訪頼忠についての記述がある。

『木曾考』では月日に関する言及は無いが、順番としては同じ天正十二年の秋に起きた妻籠城の戦いについての記述の次に置かれている。小

笠原家臣の岩岡氏の家伝である『岩岡家記』では、8月に小笠原貞慶が木曾に侵攻し、福島義昌居館を破って引き上げた後、20日経ってからもう一度出撃し、今度は板敷野や上松まで焼いて回って引き上げたとしている。『寛永諸家系図伝』では、諏訪頼忠が天正12年に鳥居峠で戦って多くの兵を討ち取られ、また妻籠においても合戦に参加したとしている。

これらの史料の存在を踏まえた上で、天正12年の小笠原貞慶の木曾侵攻に関して、主要な先行研究を見ていくと次のようになっている。

『木曾福島町史』では、①および、「今度」を近過去の意味で解釈した③の文書、そして福島合戦で戦死した贅川又兵衛の命日を元に、貞慶の侵攻および木曾福島合戦を6月に比定しており、侵攻自体をその一度だけであると判断し、④の文書を6月の侵攻に対する感状であるとしている。なお、②の文書に関しては検討されていない²³。

しかし、既に述べた通り、④からは福島合戦が10月頭に発生したことを確実に読み取れるため、この解釈は木曾侵攻が一度しか行われなかったという先入観に基づいた誤りなのではないかと思われる。

また、③と④をそれぞれこのように解釈した場合、③の8月の時点で徳川家康がとっくに認識している小笠原貞慶の戦果を、④で10月にもなって今更褒め称えているということになり、かなり違和感がある。少なくともこの解釈の組み合わせは信じがたい。

加えて、小笠原貞慶が贅川又兵衛の後家を見舞った文書が11月2日に出されていることを鑑みるに²⁴、又兵衛の命日が6月であるというのはあまりにも隔たりがありすぎるように思われる。『木曾福島町史』が贅川又兵衛の命日を6月23日であると記した根拠がはっきりと示されていないので何とも言い難いが、何らかの不正確な記録に基づいている可能性がある。

志村平治氏の2021年の研究では、『木曾福島町史』と同様、③の文書の「今度」を過去の意味で解釈し、それを②の文書から読み取れる6月13日の鳥居峠の侵攻に比定している。加えて、『岩岡家記』の記録を踏まえて、その後貞慶が松本に引き返してから20日後にあたる7月末から8月頭の時期に再び小笠原軍が木曾に侵攻し、今度は上松や板敷野までを焼き払ったとしている。④についても『木曾福島町史』と同様、6月の侵攻に対する感状であるとしている。なお、①の文書に関しては検討されていない²⁵。

志村氏は『岩岡家記』にある木曾福島城攻めの記述に着目しつつ、②で言及される6月24日付の義昌の書状を、合戦の最中に発されたものであったと解釈することで、第一度目の侵攻は6月13日に鳥居峠で始まってから、7月頭まで城攻めが続く長陣であったという結論を導き出しているようである。確かに、このような解釈を取れば、20日後が8月頭に近づくため、侵攻を8月とする『岩岡家記』の記述との整合性が取れる。また、①で敵の来襲した場所が「鳥居峠」と明記されているのと異なり、②では「其谷」となっていることから、この時に福島合戦も生起したと考えているものと思われる。しかしこの場合、その他の書状の内容との整合性や、秀吉からの援軍の動きに違和感を覚える。

小笠原軍が鳥居峠を難なく突破したという『木曾考』の逸話に従えば、小笠原軍は6月13日に鳥居峠

²³ 『木曾福島町史 第一巻』, pp.152-154。

²⁴ 『信濃史料 卷十六』, p.221。

²⁵ 『木曾伊予守義昌』, pp.104-110。

に攻め込んだ後、同日中か翌日のうちには既に木曾福島に乱入しているはずである。①の文書は秀吉が義昌からの19日付の文書に、②の文書は24日付の文書に対して返事をしたためたものである。この説に立った場合、義昌は既に木曾福島を攻められている段階で秀吉に書状を送ったことになる。そうであるならば、本拠地を焼かれ、落城の手前まで追い詰められた木曾義昌は、必死に木曾福島の救援を求めるはずである。しかし、秀吉からの返書である①では鳥居峠にしか言及されておらず、木曾福島の話は全く出てこない。加えて、秀吉は19日付の義昌からの書状を受け取り、①の返事を書いた25日の時点で、木曾に敵が来襲したことを知っていたにも関わらず、森忠政を直ぐに援軍には出さず、翌月3日の②の書状の時点でようやく派兵を決定している。しかも②の返事は、義昌からの24日付の書状に目を通してから2日後に書かれており、だいぶ余裕がある様子が窺える。このスローペースを鑑みるに、木曾福島に敵が来襲しているような切迫した状況は発生していなかったのではないだろうか。同年秋、妻籠城に徳川軍が来襲した際には、対照的に援軍に関しての頻繁なやり取りがあったことが『木曾考』に描かれており、そちらと比較するとどうしても違和感がある。やはり6月の侵攻に際しては木曾福島までの侵攻は受けておらず、鳥居峠か、せいぜいそこから少し南に下った程度のところで敵を撃退できたと考えるのが妥当なのではないだろうか。

また、『岩岡家記』の記述も、より素直に読めば第一回目の侵攻と福島合戦も8月に起きたものと受け取れるので、6月に福島合戦が起きたとする説の補強に用いる根拠としては弱いように感じられる。

④の書状がこの時期に出されたとする根拠については、志村氏は、妻籠合戦の敗報を聞いて動揺しているであろう小笠原貞慶を、家康が味方に引き留めるためであると説明している。しかし、それでもなお、家康が石川数正から聞いて最近この勝報を知ったかのような書き方をしているため、これは木曾福島合戦の最中に出された手紙への返事であると解する方が妥当なのではないだろうか。

筆者が最も支持しているのが、平山優氏の2011年の研究である。平山氏は①と②の内容から、小笠原貞慶の最初の侵攻および鳥居峠の戦いが発生した日付を5月13日としている。これについては、②の記述である「去月十三日」を、①の文書の発給日に誤って適用してしまった結果として導き出された誤りであると考え。実際には、6月の文書である①に「去十三日」、7月の文書である②に「去月十三日」と記されているので、その他の先行研究が記している6月13日が正しいと考えられる。

それはさておき、平山氏は①と②の内容より、第一回目の侵攻が鳥居峠で撃退されたと解釈し、④の史料から木曾福島合戦が起こった二度目の侵攻を10月と解している。また、③の史料から、9月の保科正直の妻籠城攻撃と、10月の小笠原貞慶の木曾福島侵攻を、タイミングを合わせて行った共同作戦であると解しており、『岩岡家記』の8月の記述については、史料で裏付けられず信憑性の低いものとして考慮の外に置いている²⁶。平山氏が明記していないので何とも言い難いが、おそらく③の文中の「今度」については、近未来を指す語として解釈したのであろう。この説に立てば、妻籠合戦と福島合戦の時系列が『木曾考』で記される順番とも一致する。

また、『寛永諸家系図伝』の諏訪頼忠の記述について、諏訪頼忠が鳥居峠で大敗したのを6月、その後妻籠で戦ったのを9月のことであると考え、系図に書かれた順番と平山説の時系列が符合する。

『木曾福島町史』では、福島合戦を6月のこととした上で、妻籠合戦を9月とし、後者に際して諏訪

²⁶ 『武田遺領をめぐる動乱と秀吉の野望』, pp.135-142

頼忠の別動隊が鳥居峠を攻めたものと解している²⁷。しかしこの場合、妻籠合戦と鳥居峠侵攻がほぼ同時期に行われた以上、頼忠はどちらかにしか参加できない可能性が高いので、頼忠が妻籠でも戦ったとする記述との整合性が取れない。また、妻籠合戦が終わった後に、小笠原貞慶とともに急いで鳥居峠に攻め込んだとしても、④の史料からその際に福島合戦が生起していることは自明であるので、参加したはずの福島合戦について系図内で言及されていないことには違和感がある。

だが、前述のように、頼忠が参加した鳥居峠の戦いを①、②で確認できる6月のものと解すれば、その後に妻籠にも参陣していることや、福島合戦への言及がないことも整合性が取れるため、筆者はこのように解釈する。

後世に書かれた『岩岡家記』などよりも、当時出された文書の方が内容の信憑性が高いことや、諸事実・諸史料の整合性の高さに鑑み、筆者は平山氏の説に依拠した上で、それを補強・敷衍する立場を取る。

なお、一部の先行研究では、上杉氏家臣の桐澤具繁と黒金景信が某年6月27日に直江兼続に宛てて送った書状（『信濃史料補遺上』, p.636）を、『信濃史料』による年代比定に従って天正12年のものとした上で、同書状の中で取り上げられている、木曾義昌が深志に布陣しているという情報を、小笠原貞慶と木曾義昌の同年6月の衝突の様子に言及したものと解している²⁸。

しかし、13日に鳥居峠に攻め込まれたことが①の書状から明らかであるにも関わらず、27日、実際にはこれは桐澤と黒金が、木曾方面に潜入していた配下の者から得た情報を記したものであるため、その少し前の時点で両軍が深志で対陣しているというのには違和感がある。『木曾考』には福島合戦の後に木曾軍が撤退する小笠原軍を迫撃し、深志城を乗っ取ったという記述があるため、その時の様子であるとすれば時系列の違和感は少ないが、そうすると②の書状に深志攻略の旨の記載がないこと、すなわち深志奪還は木曾義昌の悲願であったにも関わらず、24日に送った秀吉宛ての書状で深志攻略に関する事に全く触れなかったことと矛盾する。

そうなれば、2015年の平山氏の研究に従ってこの文書を天正10年に比定し、内容については小笠原貞種を擁立して深志を奪取することを企図する上杉氏が、深志城の木曾義昌の様子を探ったものと解する方がより自然である。文中にある、木曾義昌が弱体であり、今攻め込めばこの方面を併呑できるという旨の記述は、上杉氏と木曾氏が共に豊臣方に属しており味方関係にあった天正12年よりも²⁹、深志をめぐる対立していた天正10年の本能寺の変直後の情勢をよりの確に反映していると言えよう。また、上信濃衆が皆小屋上がりしているという記述も、筑摩・安曇郡の諸将が、新参者の領主である木曾義昌になかなか従わず、本能寺の変の後に特にそれが顕在化した時の話であると考えれば、より納得がいく³⁰。

こうして見ていくと、天正12年の小笠原貞慶の木曾侵攻は、6月と10月の二度に亘って行われ、前者では鳥居峠において木曾軍に撃退されたが、後者ではこれを突破して木曾福島まで攻め込み、福島合戦が生起したということが推定される。ここまでを踏まえたとき、冒頭で紹介した狼煙台にまつわる逸

²⁷ 『木曾福島町史 第一巻』, p.156, p.158。

²⁸ 『檜川村誌 第二巻』, p.489、『木曾伊予守義昌』, p.106。

²⁹ 『信濃史料 卷十六』, p.137。

³⁰ 『天正壬午の乱』, pp.164-165。

話に対して違和感が生じてくる。

贄川狼煙台の逸話の違和感

第一の違和感は、木曾氏が贄川氏らの離反後に小笠原軍を鳥居峠に迎えるのが二度目であるにも関わらず、件の逸話のような混乱が発生している点である。

先ほど確認した通り、贄川氏らの内通が史料上確認できるのが4月頭であるから、6月の一回目の侵攻の時点で、既に贄川氏らは小笠原貞慶に内通していたのである。とすれば、6月の侵攻において小笠原軍は鳥居峠に攻め込んでおり、地理的に考えてほぼ確実に贄川を通過しているわけであるから、その際に贄川氏らは小笠原軍に協力するか、もしくは戦っているふりをして撤退するなど、何らかの不審な行動を取っているはずである。『木曾考』は、贄川・奈良井の将兵の一部が、内通者の引き入れた小笠原軍の旗を見て驚き、慌てて鳥居峠を越えて撤退する様子を描いている。すなわち、贄川・奈良井には敵と内通していない将兵もいたのであり、それらは国境の増強のために木曾義昌が鳥居峠以南から派遣した家臣であつただろうと推測できる。そうであるならば、贄川氏らの裏切りは、遅くとも6月の侵攻が終わった時点で既に義昌の察知するところとなっていたのではないだろうか。

これまでは6月の時点で福島合戦が生起したと考えられていたので、逸話は初回の侵攻における出来事と解され、それほど大きな違和感は無かった。しかし福島合戦が10月のこととなれば、二度目にあの逸話のようなことが発生しているということになるので、この点の違和感は大きい。

無理に解釈すれば、6月の侵攻の時点では鳥居峠以南の家臣が贄川に派遣されておらず、贄川氏らは小笠原軍と戦ったふりをして鳥居峠まで撤退し、事情を知らない他の木曾氏の武将がここで敵を防ぎ切っており、その後になってからようやく贄川に増援が送られたので、10月の二度目の侵攻まで贄川氏らの内通が義昌に露見しなかったと考えることもできなくはない。しかし、妻籠城の防衛において、義昌が重臣の山村良勝を城将として派遣していることを考えれば、小牧・長久手の戦いが始まって緊張が高まっている中で、6月の贄川にだけは誰も派遣していなかったと考える方が不自然である。この点については後ほどより詳細に検討する。

更に、贄川・奈良井という鳥居峠以北の地域と、木曾氏との関係の歴史について深掘りしていくと、義昌が彼らの裏切りに気づかないほど信頼していたとは考えにくい事情が登場し、第二の違和感が生じる。ここで参照するのは、笹本正治氏の1990年の研究および、同氏による『檜川村誌』の記述である。笹本氏は奈良井氏に焦点を当てつつ、鳥居峠以北の地域と木曾氏との関係を論じている。

従来、通説的見解では、木曾氏系図や『高遠記集成』などの史料および『岐蘇古今沿革誌』などの研究の内容から、木曾氏の7代目である家村が、足利尊氏によって鳥居峠以北を含む木曾郡一帯を安堵されたという認識が為されていた。しかし、これらの史料の記述内容の信憑性は既に『木曾福島町史』の中の家高荒治郎氏の研究により疑われており、更に笹本氏は木曾家村および彼への本領安堵の存在自体に疑いを向けている³¹。

そして笹本氏は、木曾氏が武田氏に従属する以前の期間に、鳥居峠以北が木曾氏の支配下にあったこ

³¹ 『檜川村誌 第二巻』, pp.367-368、

とを示す確実な資料が存在しないことや、小笠原氏や武田氏に関する史料との照合、その他木曾氏の史料への批判、奈良井氏の居館の位置の検討などによって、鳥居峠以北は元々木曾氏の支配下に無かったと結論付けている。木曾氏と奈良井氏は、元々並立する中小の国人領主であったところ、武田信玄の侵攻に対して奈良井氏・木曾氏がともに降伏した後に、木曾氏の監視役および、武田領国の国境を守る木曾氏の勢力を補強する存在として、武田氏が奈良井氏を木曾氏に服属させ、それが両者の間に生まれた恐らく初の支配関係になったというのが、笹本氏の見解である。贅川氏も同様の、より小さな領主として、武田信玄の時代に初めて木曾氏の勢力下に入ったものであるとする。

その後、江戸時代から現代に至るまで、奈良井・贅川は「木曾」の区分に含まれ続け、そのような中で贅川氏の出自を木曾氏に繋げるような系図が後付けで創作されたことで、奈良井・贅川も戦国以前から「木曾」であったという、従来の通説のような誤信が生まれたのであると考えられる³²。

この説を踏まえると、奈良井・贅川の諸士に対する木曾氏の強い支配というものは、木曾氏が武田信玄に降伏する段階になって初めて生まれたものであり、それ以前には存在しなかったものと解される。

木曾氏が信玄に降伏したのは天文 24 年（1555 年）ごろのことであるとされているので、天正 12 年（1584 年）時点の木曾義昌にとって、彼らは従属してからまだ一世代も経っていない、比較的新参者の家臣であり、なおかつ松本平に開けたその所在地や、元々武田氏の手で従属させられたことによる独立性の高さなどから、必ずしも利害が一致しない相手であったことは想像に難くない。

しかも、恐らく小笠原氏への内通の疑いを理由として、この時既に木曾義昌は奈良井義高を殺害しているのである。奈良井氏とさほど変わらないで出自を持つ贅川氏らの動向を疑わない方が不自然だ。

これらのことを踏まえると、戦争経験の豊富な木曾義昌が、敵接近の通報という重要な役目を贅川氏らに完全に任せて、全幅の信頼を置いたとは到底思えない。少なくとも、贅川氏が離反しても対処できるような、何らかの予防線は張っていたはずである。

加えて、当時贅川にいた木曾氏家臣の中には、武田氏の旧臣もいたのではないかと考えられる。笹本氏は、武田晴信（信玄）が某年に倉沢中務少輔という人物に宛てた書状が贅川の地に伝わっていることについて、木曾のほかの史料で「倉沢」という姓を確認できないことなどを理由に、この人物は木曾の外から贅川にやって来た武田家臣なのではないかと推測している³³。

そして贅川には、同じく「倉沢」の姓を持つ倉沢久兵衛という人物に対して、天正 12 年 4 月 2 日に送られた差出人不明の書状が伝わっている。筆者は贅川という土地の共通性から、倉沢中務少輔と倉沢久兵衛を何らかの縁者と考え、久兵衛の方も武田遺臣であり、武田氏の滅亡後にも木曾に残留し、そのまま木曾氏に仕えた人物なのではないかと推測した。

倉沢久兵衛に宛てられたこの書状は、その時期（小笠原貞慶による贅川又兵衛宛ての調略の書状と一日違いである。）および内容、そして贅川という場所から、小笠原貞慶が調略のために送ったものなのではないかと考えられている³⁴。

³² 『樽川村誌 第二巻』, pp.410-417, pp.511-515, pp.523-525

³³ 「信濃の国人と武田氏」, p.32。

³⁴ 『信濃史料 卷十六』, p.148。

筆者の推測およびこれらの先行研究が正しければ、国境である贄川の地に武田旧臣の木曾氏家臣が在番していたということである。家臣としての歴史も浅く、またその出自故に利害関係が必ずしも一致せず、それどころか主家滅亡の原因を作った存在として木曾氏を恨んでいる可能性もある武田旧臣を義昌が信頼し、彼を含む集団に敵の通報を完全に委ねるような危険な真似を行ったとはにはわかには信じ難い。

木曾氏が贄川の狼煙台を用いた歴史についても考えてみたい。冒頭で確認したように、既存研究の多くは、福島合戦に至る経緯の説明も含めて、木曾氏が贄川の狼煙台に始まる通報を受けて、木曾福島から軍勢を出撃させ、鳥居峠で敵を迎え撃つ作戦を基本として動いていたという通説を前提に論じている。

しかし、笹本氏の説に依るならば、少なくとも武田氏に従属する以前は贄川を支配下に置いていないから、木曾氏は贄川の狼煙台を用いたこのような作戦を取ることができない。武田氏や織田信長への従属時代は、松本平方面は甲州征伐の一時を除けば味方の方向であるので、このような作戦を用意する必要もないし、勝手に贄川に狼煙台を整備すれば主君から謀反を疑われるであろう。となると、木曾氏が贄川の狼煙台を用いることができるのは、独立性を高めた本能寺の変以降のこととなる。そこから福島合戦までは3年も無いので、それほど贄川の狼煙台に強く依存する体制が構築されていたとは考えにくい。

実際の戦闘経過と敗因の分析

では、贄川で狼煙が上がらなかったために不意を突かれて鳥居峠を突破されたという逸話が嘘であったとして、現実の木曾氏はどのようにして小笠原氏に備えていて、そして何故それが突破され、福島まで侵攻されたのであろうか。このことについて分析し、筆者の見解を述べたい。

ここまで見てきたように、10月に二度目の侵攻を受けるまでの時点において、木曾氏が既に贄川氏らの裏切りを察知しており、彼らによる狼煙を用いた通報をあてにしていなかったのであれば、木曾氏は鳥居峠の防備を強化し、そこで敵を迎え撃つことを狙ったはずである。

実際、鳥居峠には奈良井方面に向けられた防御地形と思しき遺構の存在が指摘されている。中山道沿いにある円山公園周辺の遺構は明らかに藪原方面に向いており、『甲陽軍鑑』に記される、天文24年の武田信玄の侵攻の際に築かれた砦の跡であるといわれているが、それとは別に、街道筋から少し外れた塩沢川の尾根沿いにも、奈良井方面からの攻撃を阻むための防御施設の跡と思しき地形が確認されている³⁵。規模から推察するに急ごしらえの設備のようにも見えるが、天正12年において、木曾氏が即席で整備したこのような施設に軍勢を詰めさせ、敵方への防御陣地として利用していた可能性は考えられる。

従来の理解では、木曾氏が敵襲の通報を受けると、それに応えて木曾福島から主力の軍勢を出撃させ、鳥居峠で敵を迎撃していたという通説が自明の前提として扱われていた。それゆえに、福島合戦に際しては狼煙台からの通報が無かったことによって主力の到着が間に合わず、鳥居峠を簡単に突破されたとする理解が当然視されていた。

しかし、同時期のもう一つの最前線である妻籠に目を投じれば、山村良勝の軍勢がはじめから同地に

³⁵ 『木祖村誌 源流の村の歴史（上）』, pp.96-98。



↑鳥居峠を藪原側に少し下ったところにある円山公園。後世のものと思われる地形改編も多く、どこまでが武田氏の砦跡なのかは判然としない（2019年8月11日・筆者撮影）。

駐屯して敵を迎え撃っている。この時、『木曾考』の記述を見る限り、与川村など近隣村落からの援軍が来ている様子はあるが、木曾福島から援軍が到来した様子はない。それならば、同じ最前線である鳥居峠にも、一定数の軍勢が常駐し、福島からの援軍が無くとも当分は持ちこたえられるように、守りを固めて敵に備えていたと考えるのが妥当なのではないだろうか。

軍勢の常駐があったと考える根拠はほかにもある。それは、『木曾考』によれば、奈良井義高が木曾義昌に殺害された際、贄川に在番していたことである。奈良井の住人である義高が当時贄川に在番していたということは、義昌の指示で最前線の贄川の防衛のために詰めていたのであろう。そうであるならば、その他の鳥居峠以南の家臣も贄川

などに派遣されていた可能性が高い。また前述のように『木曾考』には、小笠原軍の侵攻に際して、敵に内通していなかった家臣が贄川・奈良井から逃げ出す様子も描かれており、これらの一部は義昌によって派遣された家臣であった可能性もある。

そして、もし義昌が贄川氏らの裏切りを最初から警戒していたならば、このような軍勢をはじめから鳥居峠に詰めさせるか、もしくは贄川の最前線に配置し、戦闘が始まって実際に贄川氏らが裏切り次第、鳥居峠へ引き上げさせる準備を整えていたであろう。『木曾考』において、贄川・奈良井から撤退した木曾軍が鳥居峠を前にあてて藪原で味方とともに持ちこたえようとしたという記述があるが、これは混乱の中で取った行動ではなく、贄川氏らが離反した場合に取る動きとして初めから想定していた行動だったのかもしれない。

現地の地形で考えても、鳥居峠の稜線から少し藪原側へ下ったところにある、武田氏の砦跡と伝わる中山道沿いの防御施設などを利用して防戦を試みれば、鳥居峠を前にあててもそれなりに有効に防戦できるようにも思える。『甲陽軍鑑』においてこの場所が「鳥居峠」ではなく「藪原」の砦と認定されていることを考えると、6月の侵攻に際してこの地で敵を防ぎ切ったことが、②の書状で秀吉が「鳥居峠」ではなく「其谷」という言葉を用いた理由なのかもしれない。

また、『木曾考』では、木曾氏家臣の上村作左衛門が天正12年に鳥居峠で戦ったことが記録されている。上村氏は黒沢村の白川という地の住人である³⁶。戦闘参加が6月と10月のいずれであるとしても、10月の福島からの援軍が鳥居峠に間に合わなかった以上、初めから贄川ないしは鳥居峠を守っていなければ、彼が鳥居峠で敵と戦うことはできない。これが天正10年の誤記であり、武田氏と戦った際の鳥居峠合戦を指している可能性も否めないが、もし誤りでなければ、木曾義昌は確実に家臣を鳥居峠以北に駐屯させていたと言えよう。

³⁶ 『三岳村誌 下巻』, p.111。

加えて、この年の木曾氏が敵襲を強く警戒していた様子は、当時の多くの文書から推察することができる。義昌は秀吉に対して何度も小牧・長久手の戦いの戦況を尋ねる書状を送っていた。これはつまり、義昌は主君秀吉と徳川との対立を強く意識し、現在の情勢に対して敏感に気を配っていたということであるから、当然深志や伊那の徳川勢にも警戒を強めていたはずである。

更に、義昌が寝返りの準備を進めていたと思われる 2 月の段階から、既に領民より志願兵を募り、軍備の強化に注力しており、その後も同様の努力を続けていたことを、義昌が発した書状から確認することができる。義昌は徳川方からの攻撃を十分に想定して動いていたのである³⁷。

これらの要素を踏まえれば、義昌は鳥居峠への敵襲をはじめから警戒しており、防備を整えていたのではないかと考えられる。

では、10 月の木曾氏は守りを固めていたにも関わらず、何故この鳥居峠を小笠原軍に突破され、福島まで攻め込まれて放火される憂き目にあったのであろうか。筆者はこの答えを単純な数的劣勢に求めたい。

天正 12 年の間、木曾氏が伊那および松本平の徳川勢から絶えず圧力を受けており、それぞれに対して妻籠と鳥居峠という別の正面で対峙していたことは、当時の史料からも確認することができる。①の文書から、6 月の時点で既に鳥居峠と伊那口の二方面への警戒を強いられていたことが明らかであり、そのような状況が妻籠合戦および福島合戦が連発する 9・10 月までずっと継続していたのである。しかもこの時期の木曾氏は、天正 10 年の動乱以来ずっと合戦続きであった。

松本平や伊那谷に比べれば耕地面積が狭く、人口の少ない木曾であるから、如何に守るに易い峻険な地形を擁し、また豊臣からの援軍も有するとはいえ、戦乱に巻き込まれ続け、兵数に勝る他勢力から軍事的に圧迫され、なおかつ二正面作戦を強いられ続けられれば、国力が疲弊して次第に劣勢に陥ることは想像に難くない。

あまつさえ、10 月に受けた二度目の侵攻は、妻籠城への敵の猛攻を退けてから間もない頃に行われている。『木曾考』によれば妻籠に籠城した山村勢は 300 騎であり、しかもこの時豊臣の援軍を謝絶している様が描かれているので、その大部分は木曾の兵であったと思われる。この数字は、『甲陽軍鑑』で木曾義昌の軍勢が 200 騎とされていることを踏まえると、その後木曾が独立性を高めて軍備を強化していたとしても、木曾の総兵力の大半であったのではないだろうか。そうであれば、妻籠城の守りのために鳥居峠方面から兵が引き抜かれ、手薄になっていた可能性は否めない。

また、木曾氏としては妻籠で徳川勢に大打撃を与えたことで気の緩みが生じ、妻籠合戦終了後に鳥居峠への兵力を回すことを怠った可能性もある。

これらを踏まえると、描き出される福島合戦の実像は次のようになる。木曾氏は遅くとも 6 月の戦闘の時点で贄川勢の離反を確信し、鳥居峠の線に下がって守りを固めていたが、9 月末、度重なる戦闘での消耗や妻籠城攻防戦への対処のために、同地の防衛が手薄になる状況が生じていた。そこへ小笠原軍が来襲し、数的優勢を生かした強襲によって鳥居峠を突破した。これに焦った義昌は、福島から予備兵力を援軍として派遣するが、これが宮ノ越で蹴散らされ、小笠原軍はついに木曾福島まで乱入した。しかし、

³⁷ 『武田遺領をめぐる動乱と秀吉の野望』, p.119、『木曾伊予守義昌』, pp.99-106。

小笠原軍は木曾氏の野戦軍を撃滅してここまで来たわけではなく、手薄な正面を抜いただけであったため、やがて木曾南部などから健在の軍勢が参集し、小笠原軍に反撃を加えた。これを受けて、小笠原軍は木曾福島城の攻略を中断して引き上げることを決断した。貞慶としては、先行する友軍の妻籠攻めによって木曾南部の軍勢がもっと拘束ないし撃破されており、反撃を受けずに木曾福島を制圧できることを期待していたのかもしれない。

このように鳥居峠突破が強襲であったとすれば、『岩岡家記』に記されている、福島合戦に際する小笠原軍の負傷者の名簿の中に、鳥居峠で負傷した青木加賀右衛門という人物の名がある³⁸ことにも納得がいく。名のある武士に負傷者が出る程の激戦が展開されたのであろう。先に触れた、上村作左衛門が天正12年に鳥居峠で戦ったとする『木曾考』の記述も、これが10月のことである可能性を有しており、この時鳥居峠で激しい戦闘があったことへの一定の補強証拠となる。

逸話の正体

では、『木曾考』に記される福島合戦の描写は、前半部分が殆ど嘘になるのであろうか。これについて筆者は、解釈によっては必ずしもそうはならないと考える。そもそも『木曾考』は、天正12年に小笠原軍が二回来襲したことを前提としておらず、むしろ一度しか来襲が無かったかのような形で記述している。これは後世の『木曾考』の編纂時に混乱が生じ、家系図や家伝などの諸記録および当時の伝承から集められた「天正12年の小笠原軍との戦い」に関する情報がすべて一度の合戦で起きたものとして扱われ、辻褄が合うように記述されてしまったためであろう。

すなわち、筆者は『木曾考』の記述について、6月の一度目の侵攻における出来事と、10月の二度目の侵攻における出来事とが、混合されて書かれたものなのではないかという仮説を立てるのである。この場合、次のように解釈することができる。

まず、小笠原軍の侵入に際して、贄川・奈良井にいた敵に内通していない将兵が藪原まで退き、そこで友軍とともに抵抗を試みたという記述は、6月の鳥居峠の戦いについてのものであると考えられる。ただし、先ほど推測した通り、この時の木曾軍は『木曾考』に記されるように不意を突かれて崩れたのではなく、事前に贄川氏らの裏切りを察知もしくは警戒しており、計画的にこのような退却を行った可能性が高い。不意を突かれたかのような書き方がされているのは、噂には聞いていた友軍の寝返りを実際にその目で確認したことについての、将兵たちの驚きが強調された結果であろうか。そして、先ほど史料で確認した通り、ここでは実際には敵を防ぎきっているのではないかと推測される。

その後の、宮ノ越まで出てきた援軍が敗北し、そのまま福島へと攻め込まれる後半の記述は、10月の



↑贄川の関所跡（2019年8月10日・筆者撮影）。そもそも当時贄川のどこを誰が守っていたのかは今となっては知る由もないが、贄川に関しては城郭跡・狼煙台跡の場所の情報までもが錯綜しており、理解が難しい。

³⁸ 『信濃史料 卷十六』,pp.212-213。

福島合戦に関する記述であると考えられる。これより以前に、鳥居峠の防備が小笠原軍の猛攻によって迅速に突破されてしまい、慌てて駆け付けた援軍が敵と宮ノ越でぶつかる結果が引き起こされたのであろう。

このように分けて考えれば、確実な史料から推測される戦闘の経過と、『木曾考』の記述とが合致する。ただし、このような解釈を取った場合であっても、狼煙台にまつわる逸話は、これまでに論じてきた数々の理由から、やはり信憑性が低いと言わざるを得ない。

結論・あとがき

これまで論じたことをまとめれば、木曾氏はできる限りの準備を整え、敵への警戒を厳とした上で、小笠原軍を正面から鳥居峠に迎え、一度目は防ぎ切ったものの、二度目は武運拙く突破され、木曾福島を焼かれたということになる。それではなぜ、敗北を贅川氏らの離反に強く帰責するような、かかる逸話が『木曾考』に記されたのであろうか。

ここからはもはや単なる筆者の憶測に過ぎないが、それは木曾氏が最大限の努力を尽くしたにも関わらず敗北したことを恥じ、悔し紛れに味方の裏切りを敗因として過度に強調し、事実を隠そうとした結果なのかもしれない。『木曾考』などの史料自体が、江戸時代になってから当時の諸記録や伝承に基づいて作られたものであるため、今となってはこのようにもっともらしく憶測するしかないことも多い。

木曾氏は筑摩・安曇郡を奪回するための乾坤一擲の策として、徳川から離反して豊臣に従属した。しかし、この選択は伊那口と松本平の二方面に敵を抱える状況をもたらし、木曾氏にその国力の限界を超える負担を与えたのだと考えられる。松本平方面のみに敵を抱えていた天正10年の段階の方が、軍事力をすべて同方面に向けることができ、深志奪還に関してまだ高い可能性があったであろう。もっとも、徳川に属し続けた場合も、飛騨と美濃の二方面に敵を抱えることとなるため、同様の負担が生じたことが想定される。そうなれば、宿願である深志奪還の実現可能性を孕む寝返りを選択するのは、極めて妥当な判断であったのかもしれない。とはいえ、その宿願が破れたことはやはり口惜しいことであり、その無念の矛先が贅川氏らの裏切り（これもまた妥当な判断である）向けられ、このような記述が形成されたのかもしれない。

これ以上のことを論じても妄想の域に両足を突っ込むだけであるので、このあたりで福島合戦に関する推論は締めくくる。本稿では、『木曾考』の記述をベースに同合戦を論じたわけであるが、その他の史料に関しては、先行研究で引用されている箇所以外に目を通していないものが多い。いずれは当会の活動を通じて、それらの史料すべてに丁寧に目を通しながら、木曾の合戦史をより鮮やかに描き出していきたい。

鳥居峠に残る防御施設の遺構に関しては、中山道沿いのもの以外には未だ訪れたことがないし、中山道沿いのものもきちんとくまなく踏査したわけではない。また、史料の文言解釈についても、古文書解読



↑木曾の北境、桜沢の石碑。史料には恵まれないが、同地付近にある桜沢砦が当時どのような使われ方をしていたのかも気にかかる（2019年8月10日・筆者撮影）。

のための古文・漢文をしっかりと学んだわけではないので、いずれフィールドワークや座学をよりきちんと積み重ねた上で、再びこの合戦についても扱うことができれば望ましいと考えている。

本稿では、平山氏の『武田遺領をめぐる動乱と秀吉の野望』や、笹本氏の『檜川村誌』などの中の画期的な指摘を、通説的見解に対して取り入れる形で、修正説ともいべきものを組み立てた上で、そこから導き出される筆者なりの推論を文字に起こした。その最たるものが、狼煙台の逸話に対する批判である。だいぶ冒険的な説になってしまったが、考えうる一つの可能性は示せたのではないだろうか。

未だ研究が足りずその段階に至っていないが、いずれは逸話の土台になっている木曾氏の領国防衛に関する通説（『木曾福島町史 第三巻』, p.989）にもメスを入れ、詳細に検討していきたい。この通説は恐らく狼煙台の逸話をベースとして、『木曾考』などにあるその他の合戦記録が当てはまるように組み立てられたものであると考えられる。この通説の再検討作業について、本稿はその糸口となる一端を担うことができたのではないかと考えている。

本稿がまさにそうであるように、木曾の戦国史に関してはどうしても確証性の高い史料が少ないため、史料から何かを組み立てるといふよりは、確証性の低い史料の内容を否定して、代わりに当てはまる内容を推定するような作業となり、机上の空論のようになってしまうことは悩みどころであるが、今後に限られた史料と偉大な先行研究を活用して、木曾の戦国史に関する研究をますます深め、知的好奇心を満たすとともに、木曾郷土史の発展の一助となることを目指していきたい。

参考文献

『木曾考』（『大日本地誌大系 諸国叢書 木曾之弑』掲載）

『甲陽軍鑑』

『信濃史料 卷十六』

『信濃史料補遺上』

『木曾福島町史 第一巻』（1982年、木曾福島町）

『木曾福島町史 第三巻』（1983年、木曾福島町）

『三岳村誌 下巻』（1988年、三岳村）

『村に根付いた人々 木曾・檜川村誌 第二巻 原始・古代・中世』（1993年、檜川村）

『木祖村誌 源流の村の歴史（上） <古代・中世・近世編>』（2001年、木祖村）

笹本正治「信濃の国人と武田氏 奈良井氏などからみた戦国時代」（『武田史研究 第6号』, 1990年、名著出版）

平山優『天正壬午の乱 増補改訂版 本能寺の変と東国戦国史』（2015年、戎光祥出版）

平山優『武田遺領をめぐる動乱と秀吉の野望 天正壬午の乱から小田原合戦まで』（2011年、戎光祥出版）

志村平治『木曾伊予守義昌』（2021年、歴史研究会）



挨拶

先年7月の当会設立以来、大学内外を問わず多くの方々に加入・ご協力いただき、当会の活動を無事に軌道に乗せることができましたことには、まことに感謝の限りでございます。ワクチン接種が始まり、新型コロナウイルスとの泥沼の全面戦争にもようやく終わりの兆しが見えてきた今日この頃、当会にご厚意を向け、協賛の意を示して下さる現地の皆様とどのように関わっていくかや、会主催での遠方の史跡探訪、対面形態で開催される東京大学学園祭への出店など、今後期待できる対面活動をどのように実施していくかに思考を巡らせることも増えてきてまいりましたが、ひとまずは現在オンラインでできる活動を完遂しようと気を引き締めなおし、この当会初の論稿集を制作するに至りました。このように、初めて当会の活動成果をまとめた形でアウトプットすることができましたのは、ひとえに協力して下さった会員の皆様のおかげであり、改めて深く感謝申し上げます。

本書は「学園祭における研究発表」というコンセプトで制作しておりますので、今後も毎年二度、五月祭と駒場祭の時期に発行していくことを目標に定めております。本年度の五月祭はオンライン形式での開催が事前に決定されていたにも関わらず、不思議な力によって開催のわずか一週間前に突然中止に追い込まれてしまいました。開催形態を鑑みて出店を見送っておりました当会としましても、このような事態の発生にはただただ首を傾げるとともに、参加を決定していた学生の皆様の無念に深く同情するばかりでございます。会長としましては、不思議な力で消された五月祭の穴を学生が自主的な活動で埋める役割の一端を本書が少しでも担うことができれば幸いであると考えまして、本来の五月祭の開催日である今日この日に本書を Web 上で無料配布することを決定いたしました。

会員たちの熱意と知的好奇心が詰まった本書でありますので、どうかご愛読のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

東京大学木曾谷研究会会長 有馬武一

木曾谷研究

第一号

発行日 2021年5月15日

編集 東京大学木曾谷研究会

発行 東京大学木曾谷研究会